

2 注目のデータ

新連載

成績にこだわる母親が増加 Benesse教育研究開発センター
「第3回子育て生活基本調査」より

3 特集

新学習指導要領へのアプローチ 第1回

「言語活動」で広がる学び

4 インタビュー

実践のポイント

体験や学び合いによって言葉の力を育み
表現を豊かにする

大阪教育大教育学部教授◎田中博之



©ヤマシタチカコ

8 学校事例

読解力育成の実践

「型」の指導によって発言への
抵抗感をなくし表現力を育成

大阪府堺市立浜寺小学校

12 特別取材

フィンランドメソッド第一人者に聞く

子どもたちの「読解」の力を育てる
フィンランドの授業

教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師◎

メルヴィ・バレ



16 資料

「言葉の力」を育てる教育メソッド

フィンランドメソッドとつけたい力の整理表

17 教える現場、育てる言葉

新連載

「これしかない」と信じるのが一流への道につながる

日本陸上競技連盟理事◎高野 進

20 明日から使えるICT講座

新連載

第1回 デジタルカメラ メディア教育開発センター教授◎中川一史

22 低学年からの学びと指導

新連載

幼小接続をスムーズに

実態把握

幼小のギャップを埋める余地、まずは指導要録や教員交流から
ベネッセ次世代育成研究所「第1回 幼児教育・保育についての基本調査(幼稚園編)」より

実践事例

幼小教師の相互派遣によって互いの指導法を学び合う
京都市教育委員会

28 Hop! Step! 小学校英語!

新連載

実践事例

コミュニケーションの楽しさや面白さを英語の世界で体験させる
さいたま市教育委員会

Q&A

コミュニケーションの楽しさと、英語への興味を引き出す場に
文部科学省Q&A

34 地方分権時代の教育行政

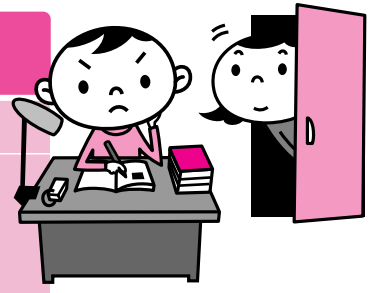
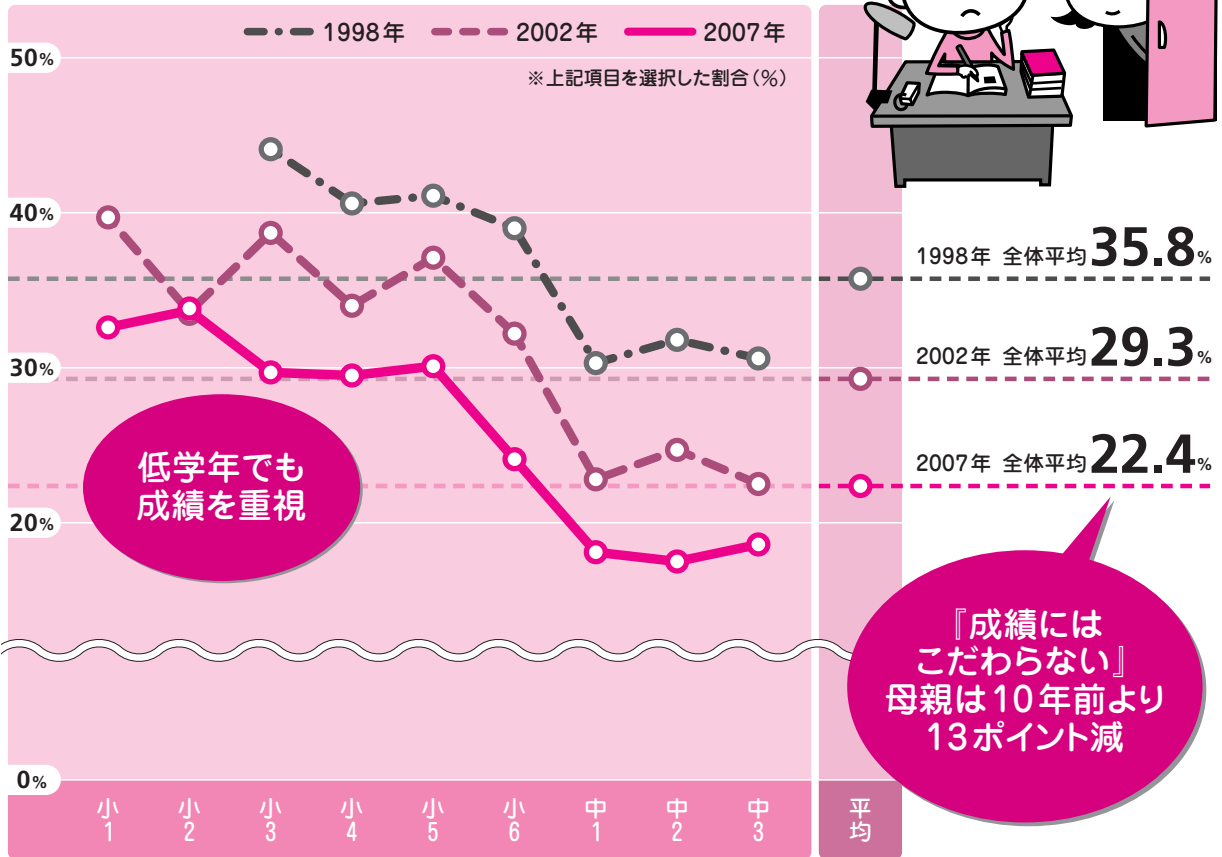
岡山県総社市 学級担任向けに日英併記で小学校英語の指導案を作成

36 編集後記

成績にこだわる母親が増加

Benesse教育研究開発センター「第3回子育て生活基本調査」より

「学校生活を楽しければ、成績にはこだわらない」



調査概要 ◎調査主体/Benesse教育研究開発センター ◎調査方法/学校通しによる家庭での自記式質問紙調査 ◎調査時期/第1回 1998年12月、第2回 2002年9月、第3回 2007年9月 ◎調査対象/首都圏(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)の小学1年生から中学3年生の子どもをもつ保護者(第1回4,718人、第2回6,512人、第3回7,282人)
*分析は母親のみ(第1回4,475人、第2回6,085人、第3回6,770人)を対象とした
*第1回のみ小学3年生から中学3年生の子どもをもつ保護者が対象 *全体平均は小3~中3生の母親の数値

教育に対する不安も背景に

ベネッセ教育研究開発センターが実施した「第3回子育て生活基本調査」の結果、「学校生活を楽しければ、成績にはこだわらない」(図)、「将来ふつうの生活に困らないくらいに学力があればいい」が選択された割合は、1998年と比べて10ポイント以上低下した(全体平均)。一方、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」が上昇。教育に対する不安の高まりもうかがえた。



関連データの
詳細はコチラ!

<http://benesse.jp/berd/>

または で

Benesse教育研究開発センターの
サイトをご覧ください

特集

新学習指導要領へのアプローチ

第1回

言語活動で 広がる学び

2011年度から実施する学習指導要領が告示された。

今年度は毎号、新学習指導要領について取り上げる。

第1回目は、各教科・領域等を貫く

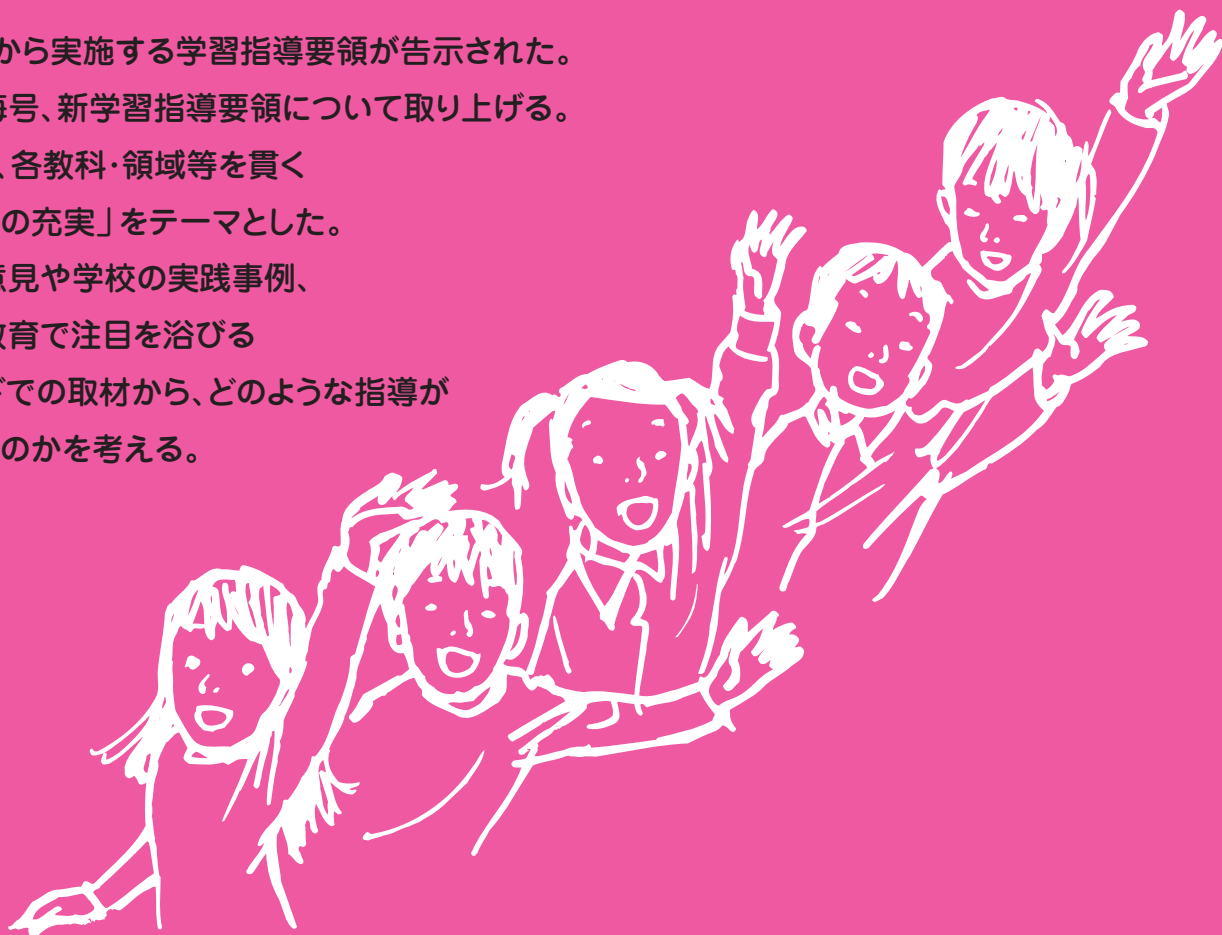
「言語活動の充実」をテーマとした。

研究者の意見や学校の実践事例、

読解力の教育で注目を浴びる

フィンランドでの取材から、どのような指導が

必要となるのかを考える。



体験や学び合いによって 言葉の力を育み 表現を豊かにする

大阪教育大教育学部教授 田中博之

新学習指導要領で、「言語活動」は教育内容に関する改善事項として位置づけられている。「生きる力」につながる子ども「言葉の力」を育むポイントは何か、どのような指導が求められているのかを、大阪教育大の田中博之教授にうかがった。



たなか・ひろゆき◎1960年生まれ。大阪人間科学部助手、大阪教育大助教授等を経て現職。専門は教育工学、教育方法学。子どもの総合学力の向上を狙った実践的な研究を行っている。編著書に、『講座・総合的学習のカリキュラムデザイン』（全6巻、明治図書）『ヒューマンネットワークをひらく情報教育』（高陵社書店）ほか。

全教科・領域等で体験を通じて「言葉の力」を育てる

新しい学習指導要領で私が注目しているのは、教育内容に関する改善事項として、「言語活動の充実」が盛り込まれていることです。「言語活動の充実」は、「言葉の力を育てる活動の充実」と言い換えた方がわかりやすいかもしれません。

私たちが生きる21世紀社会は、環境問題をはじめとしたさまざまな問題が山積みとなっています。そうした社会で大切なことは、論理的な思考や感性を働かせながら問題解決の方法を探り、自分の考えを自分の言葉で表現する能力です。PISA（注1）でも読解力を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義しています。自己実現や社会参加のための重要な道具として、言語を活用できる能力を獲得することが不可欠となるわけです。ですから、今回の学習指導要領の改訂で「言語活動の充実」が盛り込まれたことは、非常に意味のあることだと思います。

新学習指導要領では、「言語活動の充実」を全教科・領域等で展開する、としています。「言語活動」というと、一般的には「国語科で行うべきもの」と考えがちです。しかし低学年では、生活科こそ地域の人とかかわりや

注1 OECD（経済協力開発機構）が実施する、15歳児（日本では高校1年生）を対象とした国際的な学習到達度調査。2000年に第1回の本調査を行い、以後3年ごとに実施。07年12月に結果が発表された06年調査は第3回で、57か国・地域が参加。第1回は読解力、第2回は数学的リテラシー、第3回は科学的リテラシーを重点的に調べている

新学習指導要領へのアプローチ 第1回
言語活動で広がる**学び**

図1 「言葉の力」を育てる教育メソッド一覧表(抜粋)

領域A 論理的に思考したり表現する力	1 論理を組み立てる
	2 思考を明確にする
	3 なぜを問い合う
領域B 人間関係を豊かにする力	4 よさを認める
	5 笑わせ和ませる
	6 励まし応援する
	7 心を伝える
領域C イメージや感性を豊かに創造する力	8 合意を形成する
	9 イメージを創る
	10 感性を高める
	11 人の心を癒す
領域D 実践や行動につなげる力	12 正義を訴える
	13 気づきを促す
	14 企画を立てる
	15 やる気を起こす
領域E 自分を励まし創る力	16 自信をつける
	17 成長を祝い合う
	18 生き方を描く
領域F 言葉とその使い方を評価する力	19 言葉を評価する
	20 間違いを正す

*田中博之先生の提供資料より
 *一覧表の全文は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトに掲載しています
<http://benesse.jp/berd/>

自然観察などの体験を通して、「言葉の力」を伸ばす絶好の教科です。同じように中学年以降の理科や社会科でも、データを読み取って仮説を立て、それを仲間との討論を通して検証していくことによって、「言葉の力」を鍛え上げていくことができます。

もちろん、「言葉の力」を育てる上で軸となる教科は、国語科です。国語科では語彙を増やして豊かに表現できる能力や、文章を的確に理解できる能力の獲得を目指します。

しかし、「言葉の力」は単に言葉を学べば身につくものではありません。例えば、国語の授業で「敬語の使い方」を勉強しても、活用する場面がなければ役立ちません。そこで、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)で交流している高齢者に手紙を書く場面を設定すれば、子どもは高齢者に少しでも思いを伝えようとして、国語で学んだ敬語を懸命に使うおうとするはずです。

いわば、国語科の学びが「言葉を通した言葉の力の育成」であるのに対して、他教科・領域等の学びは「体験を通した言葉の力の育成」であり、「言葉の力の育成」においてはその両方が重要です。「言語活動の充実」に全教科・領域等で取り組むことには、そうした意味があるのです。

**六つの「言葉の力」を
 バランスよく伸ばしたい**

私は「言葉の力」の定義を幅のあるものにしておくことが大切だと考えています。論理的な思考力や豊かな感情表現力など、さまざまな「言葉の力」をバランスよく身につける必要があるからです。

学習指導要領の改訂に伴って2006年に設置された言語力育成協力者会議では、「言語力」を「知的活動(特に思考や論理)」、「感性・情緒等」、「他者とのコミュニケーション」

の3領域に分け、それぞれの言語力の育成について提言しています。しかし、私は更に幅広く定義する必要があると考え、「言葉の力」を6領域に分けて提案しています(図1)。

領域AからCについては、言語力育成協力者会議の定義と概ね一致しています。私が付け加えたいのは、領域DからFです。

領域Dは「実践や行動につなげる力」です。課題に立ち向かうときに、企画を立て、言葉を通して気づきを促したり、やる気を起こしたりすることができるようです。領域Eは「自分を励まし創る力」で、他者を尊重する気持ちと共に自分を尊重する気持ちを持ち、自らの人生に対して明確なビジョンを描ける力です。領域Fは「言葉とその使い方を評価する力」。敬語や丁寧語を適切に使い、その間違いを正すことができる力のことです。他者と肯定的な人間関係を結びながら社会参加や課題解決を図るためには、これらの力を身につけることが大切になります。

繰り返しになりますが、新しい学習指導要領では、「言葉の力」の育成に全教科・領域等を取り組んでいくことになります。仮説を立てて調査・観察・実験結果を検証するときに、子ども同士で議論させたり、結果をレポートにまとめて発表させたりといったことを、各教科・領域等で実践していくわけです。

これは、従来の授業スタイルからの転換を意味しています。これまでの授業は、先生が



と考えます。

例えば、新美南吉の『手ぶくろを買いに』など、国語の授業で動物を主人公とした童話について学んだあとに、子どもに「自分でも動物が登場する物語を書いてみよう」という課題を与えたとします。これは子どもにとって高度な課題であり、豊富な読書体験がある子どもでないと書き上げることは難しいでしょう。社会科学や理科などで調査や実験結果について議論や発表をさせるときにも、授業に積極的に参加できる子どもと参加できない子どもとの差がはつきりと出ることが想定されます。

こうした問題を解決する上で参考になるのが、既に活用型学習を授業に取り入れ、PISAでもトップレベルの成績を取っているフィンランドの授業です。

子どもに一方的に知識を教え込む「知識習得型」の学習が多くの時間を占めていました。しかし、新学習指導要領を基準とした教育課程では、子どもが学んだ知識を使って議論や発表を行う「活用型」の学習が、授業の中に積極的に導入されることになるはずですが、それに伴い、教科書も大きく変わることでしょう。この活用型の学習活動を進める上で非常に重要となるのが「言葉の力」なのです。

「型」の習得を通して 言葉の力を高める

私は、「言語活動の充実」や「活用型の学習」を重視する新しい学習指導要領の動きを、基本的には評価しています。一方で、この取り組みを学校で行うことは決して簡単ではない

いわゆる「フィンランドメソッド」の特徴としてまず挙げたい点は、子どもに「型の提示と習得」をしっかりと行っていることです（P.16資料参照）。童話であれば、物語の冒頭にまず主人公が登場し、次に主人公を取り巻く環境を描写し、更に主人公の個性が明らかになる出来事を描くというように、童話には必ず創作技法の「型」があります。その「型」を子どもに習得させれば、だれでも物語を描くことができるようになるわけです。同様に、子ども同士で議論をさせるときには司会進行や意見表明の「型」を学ばせます。

Pickup 中央教育審議会 「審議のまとめ」(07年11月)より引用

(1) 言語活動の充実
各教科等における言語活動の充実とは、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。

それぞれの教科等で具体的にどのような言語活動に取り組むかは8（注1）で示しているが、国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけではなく、5（ア）（注2）の第一で示したとおり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。

このため、国語科において、これらの言語の果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。具体的には、特に小学校の低・中学年において、漢字の読み書き、音読や暗唱、対話、発表などにより基本的な国語の力を定着させる。また、古典の暗唱などにより言葉の美しさやリズムを体感させるとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。

○ 各教科等においては、このような国語科で培った能力を基本に、知的活動の基盤という言語の役割の観点からは、例えば、

- ・観察・実験や社会見学のレポートにおいて、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する（理科、社会等）
- ・比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する（算数・数学、理科等）
- ・仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を評価し、まとめて表現する（理科等）
- など、それぞれの教科等の知識・技能を活用する学習活動を充実することが重要である。

また、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関しては、例えば、

- ・体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する（音楽、図画工作、美術、体育等）
- ・体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述する（生活、特別活動等）
- ・合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体

注1 8. 各教科・科目等の内容
注2 5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方（7）豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

新学習指導要領へのアプローチ 第1回
言語活動で広がる**学び**

図2 各教科でPISA型読解力を育てるアイデア (抜粋)

- 【生活科】** 春みつけ、虫みつけなどの発表会で、表現の型を使わせる
- 【社会科】** 統計教育の成果を生かして調査結果をグラフや主題図で表現させる
- 【国語科】** パペットプレイ、ラジオドラマの創作表現、創作絵本の発表会を開く
- 【理科】** 虫の生態・分布調べからグラフ化し、壁新聞を作って発表させる
- 【算数科】** グラフや資料の読み取りクイズのためのミニ単元を実施する
- 【体育科】** 運動技能測定の数値を元にして自分に最適な練習メニューをつくる
- 【音楽科・図画工作科】** 同じ芸術家の作品を比較しながら評論文を書いて発表させる
- 【総合的な学習の時間】** 国語科と連携して、創作上演活動を中心にした「ことばプロジェクト」を実践する

*田中博之先生の提供資料より
 *一覧表の全文は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトに掲載しています
<http://benesse.jp/berd/>

「フィンランドメソッド」の二つめの特徴は、個に応じた指導を徹底していることです。ある子どもには800字の課題を与えますが、別の子どもには200字の課題にするというように、子どもが課題を達成する力に応じて異なる目標を設定しています。どの子どもも自分の力に合わせて課題に取り組めるのです。三つめが、**体験を通して学習活動の重視**です。ボランテニア活動で高齢者と交流したばかりなら、子どもは真剣に高齢者にお礼の手紙を書くこうとするものです。「是非、表現したい」「解決したい」という課題であれば、子どもは少しぐらい難度が高くても意欲的に学習に取り組みます。

現行の学習指導要領で導入された総合学習では、本来の狙いであった課題解決型の学力が身につかず、単なる体験活動に終わっているケースが多く見られます。これは、国が総合学習を導入するにあたり、総合学習で育てたい学力を具体的に明示せず、その学力を育てるためのメソッドを確立しないまま始めた点に主な原因があったのではないかと思えます。これから全教科・領域等で「言語活動の充実」や「活用型の学習」を展開するときにも同じことがいええます。その目的と、目的を達成するためのメソッドが、いかに明確に示されるかが成否の鍵を握るでしょう。

また、**言葉の力を育てる上で、現場の先生方にこれまで以上に求められることになるのが、学級集団づくり**でしょう。「言葉の力」は、1人で机に向かってコツコツと勉強しているだけでは絶対に伸びません。友だちと意見を言い合ったり、アイデアを出し合ったり、一緒に活動をする中で育まれていくものです。そのためには、子ども同士で互いに学び合う関係がクラスの中にできていることが不可欠となります。

更に、**先生同士の集団づくりも**大切です。優れた教材やメソッドを共有し合ったり、お互いに授業評価を行ったりするなど、教師集団として子どもの「言葉の力」を高める努力を続けることが大切なのは、いうまでもありません。

表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする(音楽、体育等)
 ・体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う(家庭、技術・家庭、特別活動、総合的な学習の時間等)
 ・討論・討論などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする(道徳、特別活動等)
 などを重視する必要がある。

○5(2)(注3)でも述べたとおり、各教科等におけるこのような言語活動の充実には、特に教科担任制の中、高等学校の国語科以外の教師が、その必要性を十分に理解することが重要である。そのためには、学校が各教科等の指導計画にこれらの言語活動を位置付け、各教科等の授業の構成や進め方自体を改善する必要がある。

○なお、このように各教科等における言語活動を行うに当たっては、これらの学習活動を支える条件として次のような点に特に留意する必要がある。

第一は、語彙を豊かにし、各教科等の知識・技能を活用する学習活動を各教科等で行うに当たっては、教科書において、このような学習に子どもたちが積極的に取り組む、言語に関する能力を高めていくための工夫が凝らされることが不可欠である。また、特に国語科においては、言語の果たしている役割に応じた適切な教材が取り上げられることが重要である。

第二に、読書活動の推進である。言語に関する能力は、ごくむに当たっては、読書活動が不可欠である。学校教育においては、例えば、国語科において、小学校では、児童が日常的に読書に親しむための指導内容を、中学校においては生徒の読書をより豊かなものにするための指導内容をそれぞれ位置付けるなど、各教科等において、発達の段階を踏まえた指導のねらいを明確にし、読書活動を推進することが重要である。もちろん、読書習慣の確立に当たっては家庭の役割が大きい。学校、家庭、地域を通じて読書活動の一層の充実が必要である。

第三は、学校図書館の活用や学校における言語環境の整備の重要性である。言語に関する能力の育成に当たっては、辞書、新聞の活用や図書館の利用などについて指導し、子どもたちがこれらを通して更に情報を得、思考を深めることが重要である。また、様々なメディアの働きを理解し、適切に利用する能力を高めることも必要である。

〔注〕は編集部が記載

「型」の指導によって 発言への抵抗感をなくし 表現力を育成

大阪府堺市立浜寺小学校

浜寺小学校では、学習の最終目的を「表現活動」としていろいろな活動に取り組む。その際話し合いのルールや文章を書く型を子どもに教え、それに従って進めることで、子どもたち全員が発言し、文章をまとめられるようにする内容重視の指導を展開している。

**ちょっとした言葉の行き違いで
子ども同士がけんか**

浜寺小学校は2002年度から3年間、文部科学省の「学力向上フロンティア事業」の指定を受け、子どもの学力向上に取り組んできた。その結果、算数を中心とした教科学力や、子どもの学ぶ意欲については、学力調査やアンケートを通して成果が見えるようになった。

一方、教師は子どもの「話す力」「聞く力」「書く力」「論理的な思考力」が不足しているのではないかという課題を感じていた。千賀

敏弘先生は、当時を振り返ってこう話す。

「論理的に話す、相手の話をしっかり聞くという力が育っていないために、ちょっとした言葉の行き違いでも、子ども同士がケンカになる場面がよく見られました。市の学力テストでも、論理的な思考力が問われる応用問題が弱いというデータが出ていました」

言語能力の課題を感じていたときに同校が出合ったのが、当時、社会的な注目を集めつつあった「PISA型読解力」の考え方だった。単に文章の意味を理解するだけではなく、自分の問題意識に引き付けて考え、それを言葉にして表現する力が求められるPISA型



School Data

2002年度に文部科学省の「学力向上フロンティア事業」(3年間)、05年度から「学力向上拠点形成事業」(3年間)の指定を受け、個に応じた指導、プロジェクト型学習、フィンランドメソッドなどを用いて「高める力・心」「PISA型読解力」の育成に取り組んできた。また、「地域共育学校」を標榜し、地域との連携にも力を注いでいる。

校長◎由良芳子先生

児童数◎514名 学級数◎18学級(うち特別支援学級1学級)

所在地◎〒592-8349
大阪府堺市西区浜寺諏訪森町東2-163

TEL◎072-261-9407 URL◎http://www.sakai.ed.jp/hamadera-e/

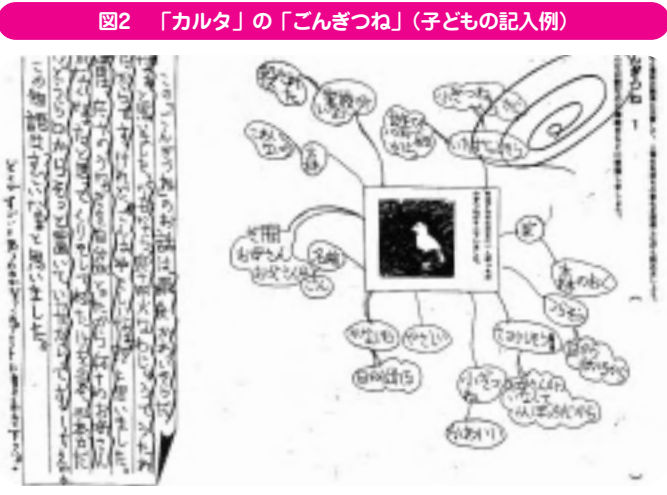
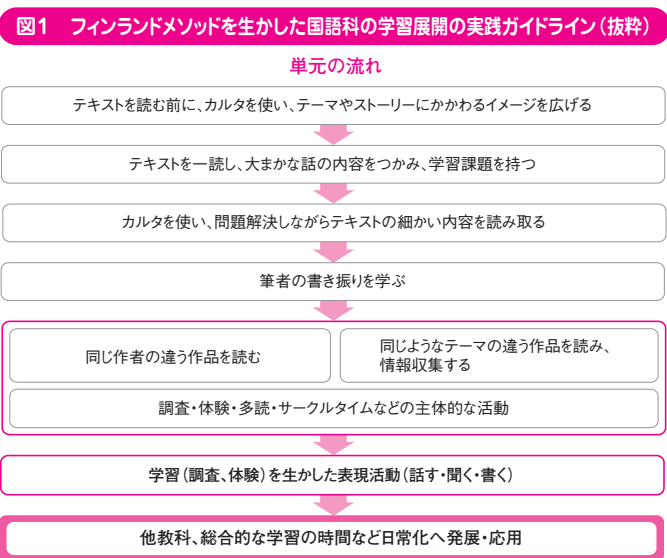
読解力こそ、「本校の子どもに必要な力ではないか」と感じたという。こうして、05年度から指定を受けた「学力向上拠点形成事業」では、PISA型読解力の育成が柱の一つに据えられ、現在の実践へと深められていった。

課題解決の先に 表現活動を設定する

浜寺小学校の「読解力を育てる教育」の特徴を一言でいえば、アウトプットを重視していることである。

「従来とはゴールが違います。これまでは、例えば理科なら、子どもに学習課題を与えて、

新学習指導要領へのアプローチ 第1回 言語活動で広がる学び



「ごんぎつね」を読んで思ったことを書き込み、樹形図のようにイメージを広げていく

それを解決することがゴールでした。しかし今は、課題解決の次のステップとして表現活動があります。観察や実験の結果を検証して、自分の言葉にまとめ上げ、それを発表会や理科新聞で表現することをゴールとしています。こうした活動を通じて、子どもの考えが深まり、考えたことや感じたことを表現する能力の育成が期待できるのです」(千賀先生)

この表現活動をより実りのあるものとするために、学習の過程で積極的に活用されているのが「フィンランドメソッド」である。

流れを示したものだ。単元の最初で、子どもたちはテキストを読む前に「カルタ」を使い、テーマやストーリーにかかわるイメージを広げる。カルタとは、紙の真ん中にキーワードを書き込み、その中心から樹木が枝葉を広げようように、連想される言葉を書き込んでいくという学習方法だ(図2)。カルタはフィンランドメソッドでは重要なツールの一つで、頭の中にある自分の考えや発想を表に出し、整理することに使う。次に、子どもはテキストを一読して感想や疑問を話し合いながら、「この単元ではこの疑問を解決したい」という学

習課題を設定する。そして、読みの目当てを持ち、文章の構造や接続詞、指示語などに気をつけながら、課題解決に向けてテキストの細かい内容を読み取っていく。

学習課題を設定し、課題解決に向けて学習を進めていくというプロセス自体は、カルタを使っていることを除けば、ほかの小学校の国語の授業でも行われていることだろう。同校の実践の特色は、その先があることである。千賀先生が説明した通り、「課題解決がゴールではなく、更にもっと先にゴールを設定している」ことだ



池側早智子
Ikigawa Sachiko
堺市立浜寺小学校
少人数担当(1, 6年生)



森崎章代
Morisaki Akayo
堺市立浜寺小学校
少人数担当(3, 4年生)

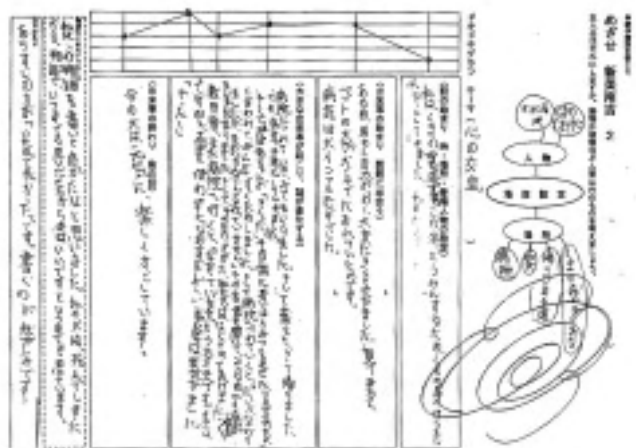


千賀敏弘
Senga Toshiko
堺市立浜寺小学校
教務主任、首席教諭



由良芳子
Yura Yoshiko
堺市立浜寺小学校校長

図3 「創作物語を書こう」の「めざせ 新美南吉」(子どもの記入例)



「ごんぎつね」を読み終わったあとの活動として、子どもたちは自分で主人公やストーリーを考えて物語をつくる

「型」を学ばせることで
子どもも表現できるよ！

子どもはテキストの細かい内容を読み取ったあと、筆者の書き振り、つまりテキストを構成する「型」を学んでいく。物語文にしても説明文にしても、文には一定の「型」が存在する。「型の提示と習得」もフィンランドメソッドで重視されていることの一つである。思考と表現の型を身につけることで、子どもは文章を的確に読み取る力や、「型」に沿って文章を書く力を獲得する。

図4 「サークルタイムの約束」

いつもそうですが、サークルタイムの時も、一生懸命考えたものはどんな考えも大切にされます。心配せずに、どんどん考えを言いましょ。

- 1 自分の考えをもって、それを発言しよう。
- 2 友だちの話は、中心に気をつけながら、最後まで聞こう。
- 3 話を聞いて、感想を持とう。初めの考えから変わってもいいよ。
- 4 その感想をもとに、自分の考えを言おう。
 ○○さんの考えに賛成です。そのわけは……だからです。
 ○○さんの考えに反対です。そのわけは……だからです。
 ○○さんの考えに似ています。それは……。
 わたしは、ぼくは、……と思います。それは……。
- 5 ひとり一回は発言しよう。
- 6 違う考えも大切にしよう。

浜寺小学校では「サークルタイムの約束」として6つの決まりがあり、これに沿って子どもは発言する。この約束は各教室に掲示してあり、サークルタイムの始めに確認している

最後は、劇や物語の創作などの表現活動へと発展する。例えば、児童文学作家の新美南吉の作品を通じて物語の「型」を学習したあと、子どもは「めざせ新美南吉」と題したワークシート(図3)に沿って自分の経験を基にした物語を執筆する。「話の始まり 時・場所・登場人物の設定」、「出来事の始まり 問題に会う」、「大きな出来事が起こり、話が変化する」、「出来事の終わり 後の話」というように「型」が提示されているので、どの子ども「型」を守っていれば物語を執筆できるというわけだ。

同校では、学期に一つの重要単元を決めて、こうした活動にじっくり取り組んでいる。

取材では、4年生担当の森寄章代先生(もりよあきよ)の授業を見学した。特徴的なのは、教材の内容に関する子ども同士での話し合いや、学習が終わったあとの振り返りに、多くの時間が割かれていたことだ。

「友だちの考えをしっかりと聞き、自分の意見を整理してわかりやすく相手に伝える力は、社会に出てから絶対に必要になります。話し合い活動の中で、自然と身につけさせたいと考えています。この話し合い活動で大切なことは、やはり『型』だと思います」

授業では、「司会の進め方」と「話し合いの進め方」という「型」を子どもに提示してから話し合いをさせていた。子どもは「型」があると話し合いが進めやすい」と話すという。また、授業の終わりには授業で学んだことを振り返って書かせる時間がある。

「振り返りの活動でも『型』が重要になります。子どもは『文章の型』を身につけることによって抵抗なく書くことができ、しかも書くことによって、自分にどのような力がついたのかを確認できるのです」

普段話さない子どもも
サークルタイムなら発言できる

「型」を使う場面はほかにもある。同校には、4年生以上を対象に週1回行う「サークルタ

新学習指導要領へのアプローチ 第1回 言語活動で広がる学び

「イム」という活動がある。10〜15名で輪をつくり、与えられたテーマについて互いに考えを述べ合うという取り組みだ。この話し合いは、図4のような型（ルール）に沿って進められる。そして最後に、友だちの意見を聞いて自分の意見がどのように変わったのか、今の自分はどのように考えるかを「サークルタイム論文」にまとめる。この活動について、池側早智子先生は次のように話す。

「サークルタイムでは、子どもたちの輪の中にボールを転がして、ボールを持った子が発言するというルールにしています。普段あまり話さない子どもにもボールを回すという暗黙の了解があつて、その子にボールが回ると、ほかの子どもたちが励ますのです。今ではだれもが臆することなく発言できるようになりました。ときには、子ども同士で意見が対立することもありますが、それでもよいのです。子どもには『意見が違う友だちに自分の意見を合わせる必要はない。意見が違つてもかまわない。けれども、なぜその子がそういう考え方を持っているのか、相手の思いを受けとめるようにしよう』と話しています」

「この資料で調べてみよう」と 自分で解決する仕組み

浜寺小学校では教科学習を通じて読解力を育てる取り組みを行っているが、森寄先生は「子どもの成長を最も感じるのは、『総合的な

学習の時間（以下、総合学習）です」と話す。

「私たちが指導しなくても、『この資料を使って調べてもいい？』と子どもが自分で資料を探し出して、自分が抱えている疑問を自分で明らかにしようとする姿が見られるようになりました。国語や理科、社会などを通じて高めようとしてきた読解力が、確実に身につくきつあることを実感しています。各教科で読解力をしっかり育てないと、総合学習での子どもの取り組みは充実したものになりません。逆に、総合学習で必要になる力を考えれば、『総合学習では資料を読み込み、表現する力が必要になる。だから、国語では説明文を読み、意見文を書ける力を伸ばそう』というように、教科で身につけさせるべき力も見えてきます。教科あつての総合学習ですし、総合学習あつての教科だと思います」

同校の総合学習は「いきいきタイム」と名付け、3年生は「地域」、4年生は「環境」、5年生は「福祉」「防災」、6年生は「キャリア」をテーマとしてプロジェクト方式で進めている。例えば、4年生では「浜小をエコスクールにプロジェクト」を07年度のテーマとして設定した。子どもたちは数チームに分かれ、ゴミの減量やエネルギーの節約を実現させる方法を調べて実行し、発表会ではその活動報告を行った。更に、「浜小環境サミット」を開き、未来へ素敵な地球を手渡すために自分にできることをサークルになって話し合い、

「私の環境宣言」を書いた。総合学習でこうした活動が可能になるのは、森寄先生が話していたように、同校の子どもが教科やサークルタイムで話し合いや表現活動をたくさん経験しているからだろう。

新学習指導要領では、総合学習の授業時数が削減され、教科学習の授業時数が増える。これを「ゆとり教育から詰め込み教育への回帰」と見る向きもあるが、由良芳子校長は「本校にはそうした考えはない」と話す。

「九九や漢字といった基礎的な学力の定着はもちろん大切です。本校でも少人数授業による個に応じた指導や、週2時間ある学校裁量の時間のうち1時間を『パワーアップ算数・国語』としてプリント学習に取り組みさせるなど、基礎学力の習得を重視しています。一方で、論理的な思考力や自分の考えを言葉にする力といった、点数にはすぐに表れない学力も、教科学習で着実に育んでいくことが大切です。総合学習では、こうした教科で養った学力をフルに使い、自分たちが生活している地域や社会が直面する課題をどうすれば解決できるかについて取り組んでいくわけです。つまり教科で学んだことが総合学習で生かされることによって、初めて『生きて働く学力』になるというのが私たちの考えです」

浜寺小学校は、読解力の育成を重視した取り組みが子どもたちの成長に確実に結び付くことを確信している。

子どもたちの「読解」の力を育てる フィンランドの授業

教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師 **メルヴィ・バレ** Mervi Wäre-von Hedenberg

2003、2006年のPISSAで、世界トップクラスの成績を上げたフィンランド。特に「読解」の指導法は各国の注目を集める。同国の学習指導要領執筆者で、国語の教科書執筆も手がける元ヘルシンキ大学附属小学校教師のメルヴィ・バレ氏に、フィンランドの教育についてうかがった。



メルヴィ・バレ◎教科書編纂者・元ヘルシンキ大学附属小学校教師。教科書制作を通して海外の先進的なメソッドをフィンランドに導入すると共に、指導要領策定委員や広域教育委員などを歴任。現在のフィンランドの教育方法の原型を作った。現場を退いた今も各地で精力的に教員研修を実施。同国の80%の教師が使用するヴェルネル・ソードルストローム（WSOY）社の初等国語教科書の責任監修者として活躍中。

読解の第一歩は「事実」と「意見」の区別

私たちは「読解」の要点は次の三つだと考えています。一つめは、すべての学習の基礎となるように、きちんとテキストを読みこなす力をつけること。二つめは、批判的に物事を判断する力を身につけること。インターネット上の情報の読み取りなどがこれに当たります。そして、三つめが問題解決能力を身につけることです。

この三つの力を育てるために、まず行うのは「事実」と「意見」の区別を子どもに教えることです。批判的な読みをするにしても、問題解決をするにしても、ここが出発点になりますし、子どもが未来の社会で生きていく上でも一番重要な力になると思います。テレビ、新聞、雑誌、インターネット、溢れんばかりの情報の中から、何が真実なのかを見極められなければ、今後の社会では通用しません。フィンランドでは、小学校段階からこの点を意識して教育を行っています。

もう一つ大切にしているのは、生活体験や現実感覚に基づいてものを考える力を養うことです。例えば、算数の授業で、子どもに家族の身長を求める問題をつくらせるとします。その際、間違っても、お父さんの身長が15センチになるような作問をしてはいけません（笑）。計算上はあり得ても、あまりにも現実

新学習指導要領へのアプローチ 第1回
言語活動で**広がる学び**



フィンランドでは、教科書の挿絵を「読み取る」活動も頻繁に行う。例えば、写真のような挿絵を見ながら、登場する動物の特徴を表現させ、友だちに何の動物かを推論させる活動などがある

的ではない答えが出ては、これまで見聞きしたこと、考えたことを踏まえながら、答えの正しさを考え直す、という作業をさせることができません。

私たちがすべきことは、機械的に答えを出す術を教えることではなく、一度出した答えに対しても「なぜそう考えたのか」「その答えは現実的なのか」と、自らに問いかける力を育てることです。PISAの問題はこうした考え方に似ているので、日頃からトレーニングを積んだフィンランドの子どもには取り組みやすかったのでしょう。

**「なぜ」「どうして」を繰り返す
 フィンランドの授業**

私たちがどのような授業をしているのかを、具体的に紹介しましょう。おとぎ話を題材にした小学校低学年向けの授業を例に挙げます。私たちはいきなり本文を読み始めるといことはしません。タイトルと表紙の挿絵を子どもに見せ、日本語の「むかし、むかし……」に相当するフレーズまで読んだところでいったん授業を止めます。そして、「さあ、これから始まる物語は本当のことかな？ それともおとぎ話かな？」と子どもに問いかけます。

多くの子どもは、すぐに「おとぎ話だ」と気がつきますが、肝心なのは子どもがなぜそう考えたのかを問うことです。「いろいろなお話を聞いたことがあるけれど、おとぎ話は『むかし、むかし……』で始まったよ」と答える子どもがいれば、経験を基にした推論ができていくということになります。

更に話を読み進め、登場人物が店に入るシーンが出てきたとします。ここでも本文の読解に入る前に、「みんなは、どんな店に、いつ、だれと、どうやって、何をしに行ったことがあるかな？」と、いったん子どもの生活体験を問う作業を入れます。こうした作業を一度入れることで、その後、本文の読解を進める際に、「ここまではこういう話だった。自分の経験に照らすと、だいたいこういうときはこ

うなった。だからこの物語もこうなるのではないか」という具合に、本文の内容と自分の体験とを結び付けて推論できます。

もちろん、物語の続きは常に予想通りに進むとは限らないですし、ときとしてあまりにも現実離れたストーリーを予想する子どももいます。そうしたときにも「なぜそんなことを言うの！」と叱るのではなく「どうしてそうなると思ったの？」と問いかけます。

また、日本ではあまり行われていないのですが、教科書の挿絵を使った活動もよく行います。挿絵は単なる「飾り」ではなく、「読む」ためのものです。子どもに絵から読み取れたことを列記させていくこともありますし、絵を基に非常に長い物語を考えさせ、ドラマを演じさせることもあります。それが難しい子どもがいたら、「私にはしつぽがあります、耳が長いです」など、挿絵に描かれたキャラクターの特徴を言わせて、クラスのみんなに、その子がなりきっている登場人物を当てさせる、といった活動をすることもあります。このように、教科書からでも、推論する力を育てる手立てはいくらでも見つかるはずですよ。

**「メントド・ガイド」で
 一定の指導を確保する**

しかし、全くの新人教師にとって、こうした授業をゼロから組み立てるのは容易なことではありません。そこで私たちの国では、ベ

テラン教師の経験知を、合理的な「メソッド（方式）」にすることに力を入れています。

例えば、先ほど紹介したような、児童への発問の仕方や授業の進め方は、教科書に付属している指導書に非常に詳しく書かれています。児童に発問するタイミングや内容、児童の答えに応じた返答のパターン、更には宿題の出し方や成績のつけ方に至るまで、単元ごとにきめ細かくフォローしています。

更に、教科書には、そのままコピーして使えるプリント教材をまとめたワークブック、CD-ROMが一つのパッケージとしてついています。ワークブックの巻頭には習熟度を測るためのテストがついており、そのあとに単元別に習熟度に応じた課題プリントが続く構成になっています。この流れに従っていくことで、テスト→習熟度によるグループ分け→児童に与える課題の提示まで、どの教師でもこなすことができます。

一方、教科指導やクラス運営のごく基本的な方法については、メソッド・ガイドと呼ばれる冊子を参照することになっています。メソッド・ガイドとは現場の教師の知見を集めたもので、国家教育委員会が基本メソッドを示したガイドと、それに従って各教科書会社が自分のところの教科書に合わせてメソッドを細かく具体的に説明したガイドの2段階があります。そこには、「児童が騒いでいるときに落ち着かせるにはどうすればよいか」「児童

がおかしな答えを言ったときには『違います』と言わずに『なぜ』と聞き返す」といったメソッドが蓄積されています。

あまり知られていないかもしれませんが、フィンランドの学習指導要領は非常に簡潔なもので、極端にいえば、ただ教育目標が列記されているに過ぎません。また、教科書検定もありませんから、教師はどの会社の教科書をおおうと自由です。そうした中で、一定の指導力を確保するためにも、こうしたメソッドは欠かせないのです。

「Learning to learn」をベースに知識を教える

私は教科書やメソッド・ガイドの執筆を長年続けてきましたが、その間に考えていたのは「1980年代までのフィンランドの教育をなんとか変えたい」ということです。かつてのフィンランドの教育は、今考えると恥ずかしいくらい画一的な方法で行われていました。私自身「みんなで教科書をきちんと読みましょう」、「先生が示したところを順番に読みましょう」、「何が書いてあったかわかった人は手を挙げて」という授業をしていました。

しかし、あるとき気がつきました。子どもはどのように答えれば先生が満足するのかだけを考え、それに沿って覚えていることを口にしていただけなのではないか——。要は、子どもが全く頭を使わない授業になってしま

っていたのです。だからこそ、この教え方ではだめだと思い「教え方の改革をしなければ」と強く思ったのです。

もちろん、物事を考えるためには、最低限の基本的な知識や概念を知っていることが必要です。しかし、「考える」と「知識を習得する」ことは、本来は隣り合わせのような概念です。「まずは知識をしっかりと覚え、それから考える」という仕方には賛成できません。

実際、フィンランドの学習指導要領では、「何をどのように学ぶか」が最大の問題であり、量をこなすことが問題ではないという点を強調しています。勉強の進め方に沿っていうなら、まずは「どのように学ぶか」を教え、その次に「どのように問題を解決するのか」という方法と、実際にそれを使うことを教えます。あくまでもこの二つが重要で、知識を身につけるのはその次の段階です。

フィンランドでは「Learning to learn」という考え方が根底にあり、知識はそのために必要なもの、という捉え方をしています。

日本の教師の熱意と経験を洗練されたメソッドに

日本でも、学習指導要領の改訂を受け「読解」に対する関心が高まっていると聞いています。2007年11月に、関西地区を中心に日本の学校を訪問しましたが、「なんとかして教育を良くしたい」と先生方が真剣に考えて

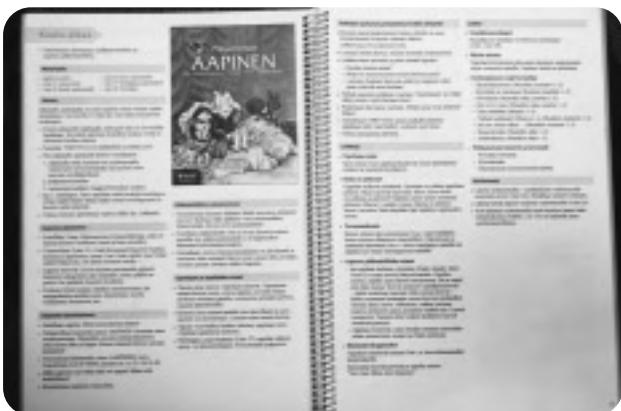
新学習指導要領へのアプローチ 第1回
言語活動で**広がる学び**

図1 教科書、指導書、ワークブック



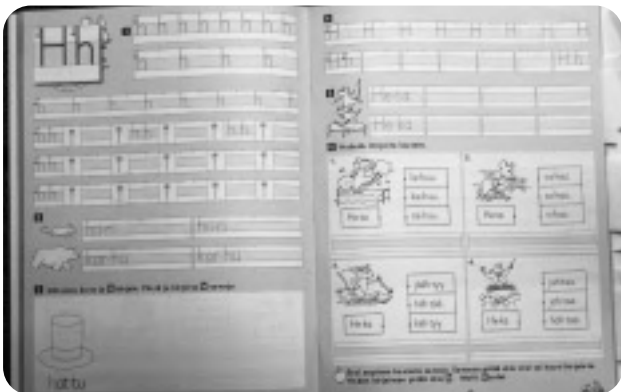
メルヴィ・バレ先生が執筆したWSOY社、小学2年生国語の教科書。左から教科書、ワークブック、教師用の指導書。このほか授業で使う素材を集めたCD-ROMなどがセットとなって、学校で活用される

図2 教師用指導書



教師用指導書。単元に応じた授業の進め方が詳細に示される。児童への質問例やそのタイミング、それに対する児童の解答例と教師の返答、更に宿題の出し方などが例示される

図3 WSOY社 教科書付属のワークブック



児童が取り組む課題などは、ワークブックにあらかじめ収録されている。同じ単元でも、習熟度に応じて何パターンもの課題があり、児童の自習教材としても使用できるようになっている。また、教科書の登場人物をかたどったシールなども用意され、ドラマを取り入れた授業などに活用できる

いること、そして新しい教育方法を熱心に学ぼうとする先生が大勢いらっしゃることに驚きました。こんなに強い思いは、世界中どこでも感じたことはありません。授業の事前準備をしっかりと行い、自作のプリントを用意してくる先生。黒板にどのように書くか、板書計画をきちんと立てている先生。私は日本語は理解できませんが、そのくらいのことはずぐわかりました。ここまで一生懸命な教師は、フィンランドにはほとんどいないでしょう。

ただ、授業をいくつか見るうちに「なぜ今この活動をしているのか」ということを深く突き詰めずに進む授業も多いことに気がつき

ました。例えば、子どもを静かにさせるのはとても上手なのに、静かにさせるだけで終わってしまい、肝心の子どもが全く頭を使っていない授業が見受けられました。

また、子どもに一齐に音読をさせる形式の授業では、読み始めた瞬間に、40人のクラスのうち10人くらいの子どもが、明らかについていけない状況が見られました。一律のスピードについていけない子どもは、文字を目で追っているだけで必要な学習ができませんし、逆にすらすら読む力がある子どもにとっては、無意味な学習の時間になってしまいます。私なら、黙読のあとに、「1人で課題に

取り組む『力のある子』のグループ」、「グループでなら課題に取り組むことのできる子」のグループ」、そして、私が「『つきっきりで読み方を教える』グループ」の三つに、クラスを分けていたと思います。

日本の先生方の「すばらしい教育をしたい」という思いを子どもの力に変えていくためには、明確な目的と「具体的にどうすればよいのか」という手立てを持つことが大切です。経験を集約し、合理的なメソッドとして洗練させていくことで、今後、日本の先生方の熱心な力を最大限に生かしていくことができるかと期待しています。

フィンランドメソッドとつきたい力の整理表 *白抜き文字は小誌の該当箇所

領域	メソッド	つきたい力	
1. カリキュラム編成	①算数、国語、社会等の複数の教科を横断して読解力を育てる指導を行う ②ドラマ科やプロジェクト学習週間を設定して表現力や課題解決力を育てる	・読解力 ・表現力、課題解決力	
2. 単元構成	①既存の知識・技能を活用させる問題解決的な学習を設定する ②読む・書く・話す・聞くという4言語活動を関連づけて取り入れる ③情報の取り出し・解釈・熟考・評価を関連づけて取り入れる ④音声言語と文字言語を変換させながら表現をさせる ⑤個別学習、小集団学習、一斉学習を組み合わせる	・問題解決力 ・総合言語力 ・調査研究力 ・モード変換力 ・協同性、協調性	
3. 家庭学習との連携	①家庭での親子読書や地域図書館の利用を促す ②作文やレポート、問題づくり等の課題探究型の宿題を出す	・読書習慣 ・表現力、思考力	
4. 指導方法	(1) 多様な資料の活用	①複数の資料を比較・総合して結論を出させる ②資料の先読みや資料の間違った箇所の訂正をさせる ③生活の中の身近な題材や社会問題を学習内容として取り上げる	・比較分析力 ・先を読む力、修正力 ・生活に活かす力
	(2) 型の提示と活用	①思考と表現の型を教えて個性的に活用させる ②思考でも表現でも常に主題を意識化させる ③内容理解だけでなく作品批評や制作技法の評価を行わせる場面を設定する	・基礎学力を活かす力 ・主題把握力 ・作品評価力
	(3) 協同的集団づくり	①サークルタイムや相互評価を通して考えの深化や表現の練り上げをさせる ②学習規律の在り方をグループで考えさせてルールを守らせる ③宿題の答え合わせや宿題の作品発表を学級全体で行わせる	・討論力、相互評価力 ・学習規律 ・協同性、協調性
	(4) 表現活動の重視	①多様な表現活動をさせる(バベット[人形]劇、続き話づくり、書き換え、条件作文等) ②即興表現を行わせて豊かな発想力や表現する意欲を育てる ③異なる形式のテキストを組み合わせてまとめさせる(レポート、新聞)	・表現力 ・即興表現力 ・総合表現力
	(5) 思考の活性化	①カルタを用いて自分の考えや創作物の構想をまとめさせる ②常に「なぜ？」を問い、それに自ら論理的に答えるようにする ③資料の裏にある仮説・根拠・仮定を考えさせる	・発想力、関係性構造化力 ・論理的思考力 ・洞察力、推察力
	(6) 自分づくり	①常に自分の言葉で考えて、自分の考えを論理的に表現させる ②自らの調査や実験等で収集したデータを基にして資料を作成させる ③自己成長や学力向上の軌跡を振り返らせて自信をつける	・自ら考える力 ・主体的な資料作成力 ・自信、自尊感情
	(7) 個に応じた指導	①朝の始業前に学力に課題のある子に対して補充指導を行う ②授業中に、課題達成力の違いに応じて異なる学習課題を与える ③一人ひとりのレベルに応じた学び方を育成する	・基礎学力、自尊感情 ・基礎学力、自尊感情 ・学び方のスキルと態度

*大阪教育大・田中博之先生の提供資料より

*白抜き文字は、その項目に関連する小誌の該当箇所を示している。「上」は上段、「中」は中段、「下」は下段を示す(行数に小見出しは含まない)

それぞれのメソッドに関連する小誌の該当箇所を示しています。ご参照ください

日本陸上競技連盟理事 高野 進

「これしかない」と信じるのが 一流への道につながる イメージを走りに結びつける創造力

陸上競技の400メートル走で3回オリンピックに出場するなど、日本を代表するスプリンターだった高野進さん。

現在、母校の東海大学で後進を指導する高野さんは
「何かを究めようとするなら、選択肢は一つしかないと思う。
そこに最高の情熱とアイデアを向けることが重要です」と熱く語る。

一流のスプリンターに 求められる「観察する目」

東海大学湘南キャンパスの陸上部グラウンド。メニューに沿って練習に取り組み選手を目で追いながら、ときおり、高野さんが「彼はどういうイメージで走っているのかな？」などとつぶやく。世界を舞台に活躍するOBで教え子の末續慎吾選手の姿も見える。

高野さんの肩書きは、体育学部競技スポーツ学科の准教授である。大学でスポーツ科学論などを教えるかたわら、毎日午後、陸上部のコーチとしてグラウンドに立つ。指導するのは10人ほどの女子学生を含む約50人の短距離選手だ。中には学生でトップクラスの有望選手もいる。

「大事なのは走りを創造することです」と高野さんはいう。そのために選手に求めるのが「観察する目」である。



高野 進

たかの・すすむ 財団法人日本陸上競技連盟理事・強化委員長。東海大学体育学部准教授。日本スプリント学会会長。1961年、静岡県生まれ。84年のロサンゼルス・オリンピック、88年のソウル・オリンピックの400メートルで共にベスト16。92年のバルセロナ・オリンピック400メートルでは、日本の短距離選手として60年ぶりに決勝に進出、8位入賞を果たす。400メートル44秒78の日本記録は今も破られていない（2008年2月末現在）。

スプリント競技

◎陸上で短距離競走を意味し、100メートル、200メートル、400メートルの3種目にハードル（100メートル、110メートル、400メートル）とリレー（4×100メートル、4×400メートル）を含めた競技。一般的には、上体、下肢共に優れた筋力を持ち、先天的に優れた反射神経が要求される。最近ではバイオメカニクスによってスプリンターに必要な「筋」や「動き」が解明され、日本人選手もトレーニングによっては、世界のトップランナーと十分に戦えるようになってきた。

「ウォーミングアップやレースで周囲にいる選手の動きを見ながらヒントをもらおう。また、指導者の態度や言葉の端々から、何を要求しているのかを察知する。それを自分なりに取り込んで一つの形にしていけます」

高野さんは「スプリンターはアーティストです」という。100メートルや200メートル、400メートルといった距離をスタートからゴール地点までいかに速く着くか。選手は、そのために走るときの腕の振り方など何通りものイメージを持っている。このイメージは「降りてくる」というのだ。そのイメージを具現化し、自身の最高のパフォーマンスを見せるため、試行錯誤を繰り返す。

バイオメカニクスなど科学的な視点で選手を指導することもある。ただ、科学的な裏付けが大事とはいえ、スポーツの世界では科学は走りの一つの要素でしかない。最終的に問われるのは、選手が「観察」して得たイメージを、創意工夫と想像力で自分の走りに結びつけていく

「これしかない」と信じることが
一流への道につながる
イメージを走り結びつける創造力

同じグラウンドに立つ上で 不可欠な「共通感覚」

能力だ。それはスプリンターのセンスでもあるが、そうしたランナーの内面の葛藤を「アーティスト」と高野さんは自身の言葉で表現する。

一見、リラックスした雰囲気練習風景だが、選手にとっては「観察」し、指導者のメッセージを敏感に受け止めて（新しいもの）を生み出す場なのだ。

高野さんは子どものころから駆けっこには自信があった。中学時代は陸上部に所属。本格的に400メートルを始めたのは高校に入ってからだ。最初は1600メートルリレー（4×400メートル）の選手で、以来およそ30年間、理想の走りを追究してきた。この経験から、個人競技であるスプリント競技において高野さんが大事にするのは、同じグラウンドに立つ者としての「共通感覚」である。

「50人の短距離チームは、競技会に出場する選手だけで動いているのではない。大会で勝つという目標があって、その目標の下にコーチをはじめ、控えの選手やマネージャーなど全員が役割を担って参加している。代表選手は、そういう共同作業の延長にいます。この共通感覚がないと強くなりません」

もちろん選手には記録という目標がある。だが、記録もチーム内に「共通感覚」がないと伸ばすのは難しい。個々の選手に合わせて技術的な指導はするが、モチベーションは1人で維持できないし、指導者をはじめ仲間とのコミュニケーションが大事になる。記録を目指して走

るのは本人でも、それは共同作業の上に成り立っているのである。

「勝とうが負けようが自分の世界だから関係ないというのは、まだ本人がレジャーやレクリエーションの段階にとどまっているということです」と高野さんは続ける。仲間との「共通感覚」があると自分自身の目的意識が研ぎ澄まされ、頑張りが利き、記録を狙う気持ちをより強く保てるようになるのだ。

高校時代に記録を持っていても、大学で伸びない選手がいる。自分のやり方を変えないためである。高野さんは「自分が伸びてきた過程を大事にする気持ちは分かる」としつつも、「過去の経験は土台です。しかし、それに縛られると新たな一歩を踏み出せない」と話す。周囲との間に壁ができて、互いに「共通感覚」が持てないからだ。

高野さんが常々モットーとして掲げている言葉に「ボジティブ・ノンレジスタンス」がある。「肯定的無抵抗」という意味だ。高野さんは高校、大学を通して、コーチの指導には全面的に従ってきたという。コーチが要求することを100%消化して、それを自分の走りで具体的な形にしてさらに高いレベルで示すように努力してきた。そうやってコーチと自分の間に「共通感覚」を築いてきたのだ。

走ることでも自分が成長していく 醍醐味を体感する

一流の選手は「完成されたもの」としてそこにいるのではない。時間をかけて積み上げてきたプロセスがある。

「競技会でスタートラインに立つということは、登山

でいえば頂上の一歩手前にいるのと同じです」と高野さん。92年のバルセロナ・オリンピックでの400メートル決勝で、日本人として60年ぶりにファイナリスト（決勝進出者）になった経験を踏まえて、こう続ける。当時、高野さんは31歳。

「あの時はプレッシャーがすごかった。それだけ自分が高いところに立っているからで、少しでも失敗したら転落するかもしれないという恐怖です。一方で期待もありました。ここまで登ってきた自分への期待、あと一歩を踏み出して頂点にたどり着けば、別の世界が見えるに違いないというワクワクした気持ちですね」

どんな競技会でもスタートする前とゴールした後では、自分の「視界」が変わっていることに気がつく。プレッシャーに耐えて走り切ること、「違う世界」を見つけることができるのである。このスリル感を体感するために、練習の厳しいプロセスがあったという。

競技を通して自分が変わるということは、その人が成長していることを意味する。走りによって、それを実感する。これはランナーであることの醍醐味であり、高野さんが後進に伝えたいのもまさにこのことだ。この喜びは選手本人のものであると同時に、指導者自身のものでもある。2003年夏、世界陸上パリ大会の200メートル決勝で教え子の末續選手が3位でゴールを駆け抜けた時、「自分の目の前の仕事が変わってくると思いました」と高野さんは話す。それは「自分の生き方が変わる」ことへの予感だったかもしれない、というのだ。

「感動」に人が進化する 原点がある

自らの競技生活を、高野さんは「私にはほかに選択肢



高野さんが指導する東海大学陸上部の練習風景



はないという気持ちがあった」と振り返る。

「400メートルは苦しい種目です。ただ、私を持つすべての力を充填して、残らず放出できるのは、これしかないと思っていました。自分のポテンシャルを一番引き出して、自分自身が有能であると思えるものが400メートルだったので」

一流の選手は「自分がやることはこれしかない」と信じている。だから悩まない。学生の中にはオリンピックを目指したいと思っている選手もいれば、将来は指導者になりたいと考えている選手もいる。何を目指すにしても、「自分にはこれしかないという気持ちで、そこに最高の情熱、アイデア、興味——自分の持てるものすべてを注ぐことが大事です」と高野さんは助言する。

最近、高野さんは大学教員、陸上コーチ以外にも幅広い顔を見せている。2年前、アスリートの自立を支援するアスレテイクス・ジャパン株式会社（旧社名・ラスト株式会社）を設立、厚木市にコミュニケーションレストラン「Lap Time（ラップタイム）」をオープンさせた。この店では教え子の選手も働いている。「食のサービスは相手の気持ちを考えることが基本。自分の走りで他人を感激させるのは一流選手の要件です。接客を通していかにお客様に感動してもらうかを学びながら成長してほしい」と語る。

人も動物も「速く走る」のは本能だ。ただ、人間の場合、そこには感動を求めろ。「本能的なものと同じで深いもの、両方を持つて走るの人間だけです。実に興味深い」と、高野さんはいふ。「そこに人が進化する原点があるような気がする」といふのが、彼の考えだ。これも走りを通して後進に伝えたい大切なことの一つなのだ。

明日から使える ICT講座

第1回 デジタルカメラ

現像代や失敗を気にせず
画像の教材を準備できる

皆さんは、授業でデジタルカメラ（以下、デジカメ）を活用していますか。家庭ではよく使っていますが、授業となると尻込みをしている先生が多いのではないのでしょうか。しかし、もう避けては通れません。新学習指導要領では、各教科・領域等で、体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う「言語活動」を重視しています。この活動での必須アイテムがデジカメです。

デジカメの特色は簡便性です。フイ

不安がらずに 子どもに任せて 使わせてみよう

デジタルカメラを授業で使いたいと思っても、「子どもが壊してしまいそうで……」「子どもに教えられるほど使いこなしていない」という不安の声が多く聞かれます。しかし「本来、デジタルカメラは非常に使いやすい道具」と導入を勧めるメディア教育開発センターの中川一史教授に、授業での活用のコツをうかがいました。

ルムカメラよりも気軽に使えます。例えば、デジカメなら現像代を気にせず何枚でも撮れますし、撮影したその場で画像を確認できるので、失敗が少なくなります。テレビにケーブル1本でつなぎ、大画面で写真を見せることもできます。プロジェクトターの操作が苦手な先生でも、これなら簡単です。

とはいえ、自分がしっかり理解していないことを子どもに教えることに抵抗のある先生もいるでしょう。この場合、「子どもと一緒に学んでいこう」という気持ちが大切になります。デジカメなどのICT機器は、

子どもの方が使い方をよく知っていることが多いものです。取扱説明書を読むことも大切ですが、子どもに「ちょっと操作を教えて」と頼んでもよいのです。中学年以上なら、クラスに何人かは詳しい子がいるでしょう。彼らを「デジカメ係」に任命してみてもどうでしょう。「先生に頼りにされている」という気持ちは、子どもの自信や意欲を育むよいきっかけとなります。

今後も、学校におけるICT活用が更に広がることは間違いありません。まずはデジカメを突破口に、苦手意識を克服していきましょう。

活用度UP! | ワンポイントアドバイス

「充電ボックス」設置の勧め

「デジタルカメラを使おうと思ったらバッテリー切れで使えなかった」という経験はありませんか。こうしたことが続くと、次第に使うのが億劫になります。そこで、ある学校の工夫を紹介します。まず、色の違うカゴを2つ用意します。使用して電池残量が少なくなったカメラは一方のカゴに入れておき、情報担当の先生が充電します。充電が済んだカメラはもう一方のカゴに入れ、使うときはそのカゴから持っていきます。情報担当の先生がメンテナンスできる体制ができていれば、使いたいときにいつでも使えるようになり、活用度も確実に向上していきます。



写真提供/鳥取県三朝町立西小学校



講師 中川一史先生

独立行政法人メディア教育開発センター教授、金沢大教育学部客員教授(併任)。数多くの小・中学校で指導・助言を行っている。

●活用の中心は「教材の補助」として

低学年では、必ずしも授業で子どもにデジカメを持たせる必要はありません。先生が撮影した写真を授業の導入としてテレビを使って大きく提示したり、写真をプリントアウトして教材の1つとして配ってみたいしてみませんか。

●「言葉」を補う手段としての撮影を体験させる

先生がカメラの取り扱いに慣れてきたら、子どもにデジカメを使わせてみましょう。写真は「言葉で表現できないことを補うための手段」とも位置づけられます。ある学校では、日直にデジカメを持たせて校庭や教室で見つけたことを撮影させ、写真に「今朝寒かったので道が凍っていた」などの言葉を付け加えて、朝の会で発表するという活動をしていました。子どもの「伝える力」を養おうと始められた活動です。

子どもに撮影させる場合、配慮したいのが撮影枚数です。子どもはシャッターを押すことが面白くてどんどん撮影していきまから、写真の整理や選択が大変になります。そこで事前に枚数制限を設けたり、撮影対象を明確にしたりすることで、撮りすぎを防ぎます。

撮るときの位置や角度など技術面の指導は、中高学年になってから大丈夫。低学年の子どもに対しては、まずは撮影を経験させることに主眼を置きましょう。

授業の導入に画像をテレビで見せる



授業を始めるときに、先生が撮影した写真をテレビを使って子どもに見せ、これから始まる授業への期待を高めさせましょう

伝えるための手段として撮影させる



低学年の子どもにデジカメを使わせる狙いは、気づいたことや見つけたことを「伝えるための手段」の1つとして映像を経験させることです。技術的な指導は重視しなくてもよいでしょう
写真提供/相模原市立東林小学校

低学年
向け

授業の導入として
撮影した写真をテレビで見せる

●言葉をわかりやすく伝える手段として

3年生以上になると調べ学習や発表の機会が増えますから、子ども自身がデジタルカメラを持って撮影します。この段階での写真は、自分の主張に説得力を持たせるための素材という位置づけです。

●テーマ・目的を意識して撮影させる

ある学校の4年生の社会科の授業を紹介しましょう。テーマは「校区内の道路の交通量調査」。交通量が多く注意が必要な場所を調べて、写真を撮って発表します。更に一歩踏み込んで、ルーズ（離れて撮影する）とアップ（近づいて撮影する）といった撮り方の違いも伝えます。紹介したい内容の全体像を見せたいときはルーズで、詳しく紹介したいときはアップで撮ることを教えましょう。撮影するテーマや目的を明確にしておけば、子どもは最適な対象やアングルを選択し、撮影できるようになります。ブレやピンぼけなどの失敗は、撮り直しが容易なデジカメならほとんど心配がありません。1グループに1台持たせるなどして、どんどん撮らせましょう。

設備が整っている学校では、電子ボードを用いて発表できますが、紙に書いた地図の上にプリントアウトした写真を貼って掲示してもよいでしょう。各校の設備・機器などに応じ、紙とデジタル機器を使い分けてください。

目的によって撮影方法を変える



交通量調査ではどれほど車が通っているのかを伝えるために、離れて撮影しています。目的に応じた撮影の仕方を教えるよい機会です
写真提供/松戸市立馬橋小学校

プリントアウトした写真を並べて検討



写真をプリントアウトすれば、子どもたちが一度に検討できます。アナログとデジタルを上手に使い分けるとよいでしょう

中高学年
向け

調べ学習では
「伝えたいもの」をどんどん撮らせる

幼小接続をスムーズに

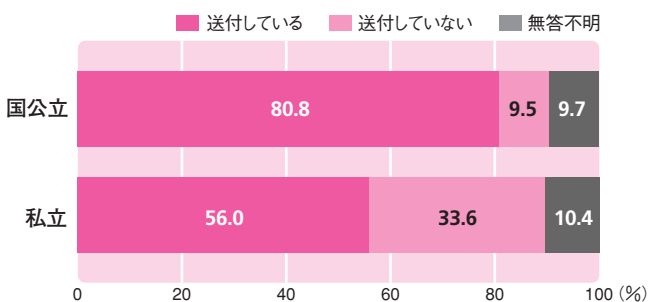
幼小接続の段差をなくし、「小1プロブレム」を克服するには、幼稚園・小学校が相互の教育を理解することが不可欠である。課題の所在をベネッセの調査データによって明らかにすると共に、京都市の実践を紹介する。

実態把握

「第1回 幼児教育・保育についての基本調査(幼稚園編)」より
 幼小のギャップを埋める余地
 まずは指導要録や教員交流から

1 指導要録を送付しない園が約3割

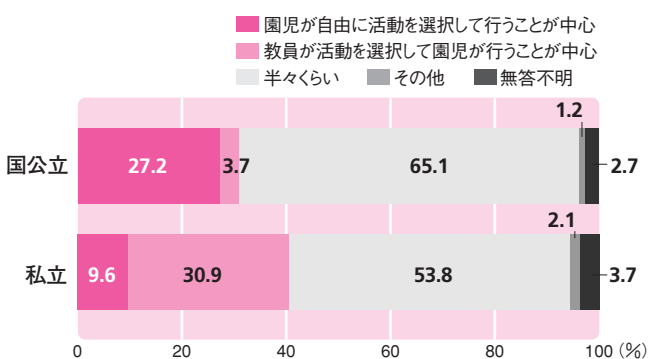
指導要録の写しまたは抄本の小学校への送付の有無



学校教育法施行規則では、国公立すべての幼稚園は園児の育ちを記録した指導要録の写しまたは抄本を小学校へ送付することが義務付けられているが、実際に送付しているのは、国公立の80.8%、私立の56.0%にとどまった。P. 24から紹介する京都市の幼小交流教員へのインタビューでは、指導要録を効果的に活用するためには、幼小の教員が指導要録の情報を基に、情報を直接交換することの重要性が指摘された

2 私立幼稚園は教師主導型の傾向に

保育のタイプ



国公立共に、「『園児が自由に活動を選択して行うこと』と『教員が活動を選択して園児が行うこと』が半々くらい」という回答が最も多かったが、国公立では次に27.2%が「園児が自由に活動を選択して行うことが中心」と回答し、私立では30.9%が「教員が活動を選択して園児が行うことが中心」と回答している。私立の方が、教師主導型が多い傾向にあることが明らかになった

◎図1~6出典

「第1回 幼児教育・保育についての基本調査(幼稚園編)」

◎調査方法

郵送法(自記アンケートを郵送により配布・回収)

◎調査時期

2007年6月

◎調査対象

全国の園児数30人以上(一部、園児数不明の園も含む)の国公立幼稚園の園長・副園長(教頭)・主任の先生(1園につき1名が回答)

◎有効回答数

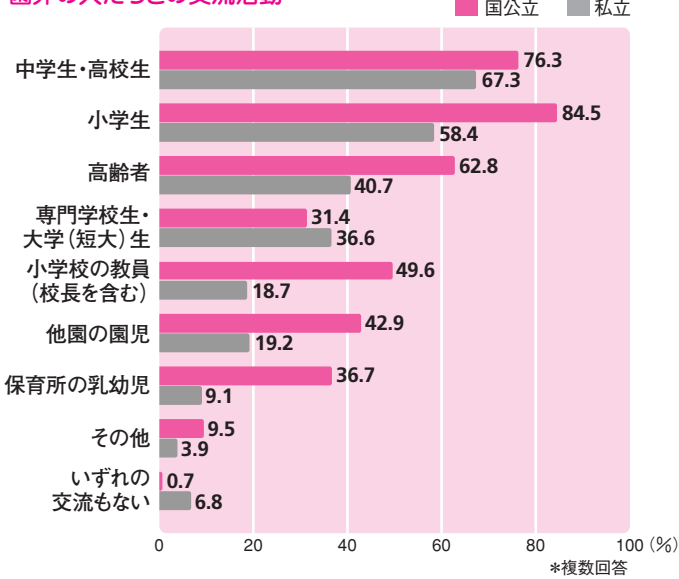
国公立401、私立1,203

ベネッセ次世代育成研究所は、全国の国公立幼稚園を対象に調査を行った。その結果、指導要録(写しまたは抄本)の小学校への送付や、幼小教員の人事交流など、幼稚園と小学校の接続に課題があることがわかった。特に、幼稚園全体の約6割を占める私立幼稚園は、国公立に比べ、小学校との交流が少ないこともわかった。最近では「小1プロブレム」(注1)などの課題に対応するため、低学年の指導を考える上で幼小接続に対する関心が高まっている。P. 24以降では、幼小の教員に互いの教育現場を体験させる京都市の取り組みを紹介する。

注1 基本的な生活習慣や集団生活のルールが身につけていない児童などにより、授業が成立しない状況を指す

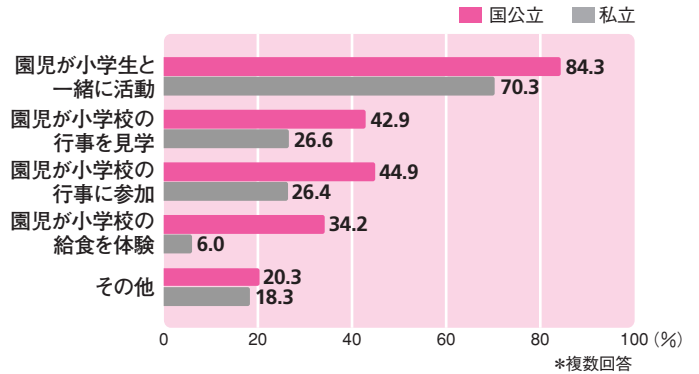
3 園外の人との交流活動は、小中高生が中心

園外の人たちとの交流活動



小学校との交流活動の内容

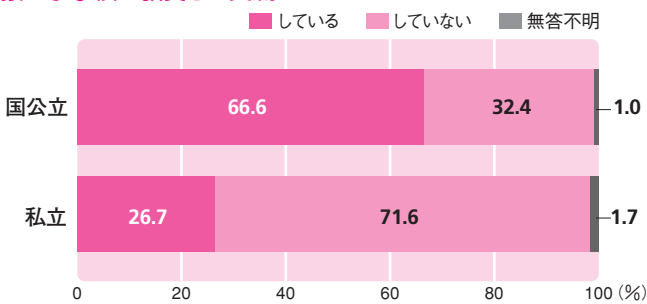
(「小学生」か「小学校教員(校長を含む)」と交流した園のみ)



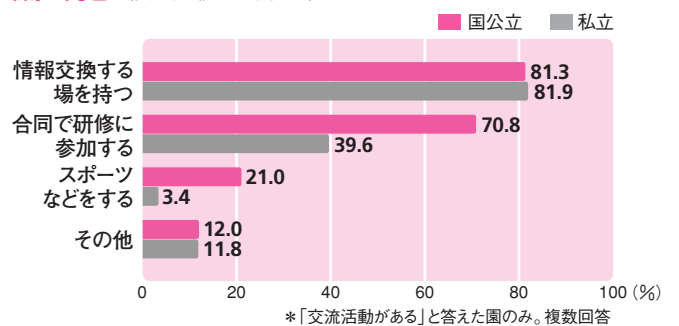
「小学生」か「小学校の教員(校長を含む)」と交流活動をしたことがある園のうち、最も多い活動は「園児が小学生と一緒に活動する」だった。全体的に、私立よりも国立のほうが園外の人たちとの交流活動は多い

4 私立幼稚園と小学校の教員交流は約3割

近接の小学校の教員との交流



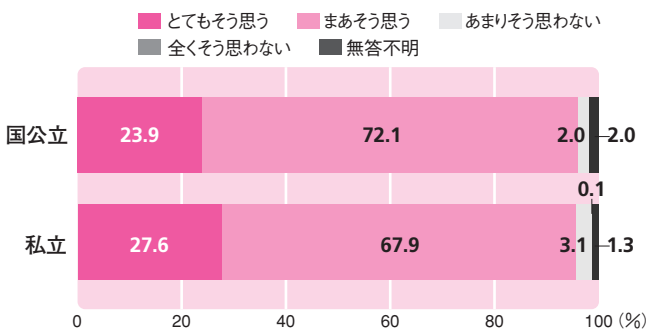
交流の内容 (交流活動がある園のみ)



国立では66.6%、私立では26.7%の園で、幼稚園教員と小学校の教員の交流活動が行われている。教員同士の交流活動がある園のうち、約8割が「情報交換する場を持つ」と回答している。「合同で研修に参加する」割合は、国立で約7割、私立で約4割となっている

6 保護者とコミュニケーションがよくとれている

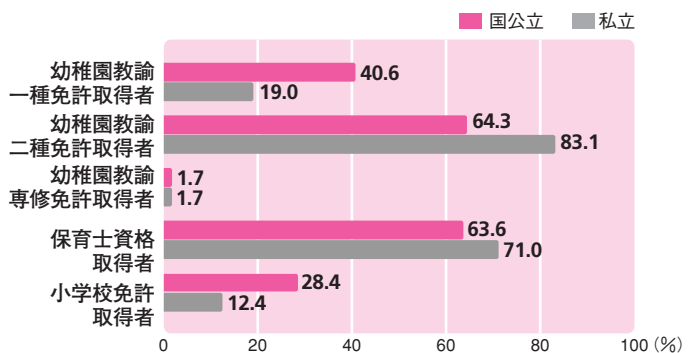
保護者とよくコミュニケーションがとれているか



幼稚園では保護者がかかわる活動が多いほか、園児の送迎時のやりとりで保護者と顔を合わせることが頻繁にあるためか、9割以上の幼稚園が「保護者とよくコミュニケーションがとれている」と回答している。P. 24から紹介している京都市の事例では、子どもが小学校に上がると、担任と保護者とのコミュニケーションの機会が急減してしまう実態がわかった。幼小のギャップは、子どもだけでなく保護者にもあるようだ

5 小学校教諭免許の保有は 国立幼稚園教諭の約3割

教員が保有する免許の種類と割合



幼稚園教諭の小学校教諭免許保有率は、国立で28.4%、私立で12.4%だった。なお、P. 24から紹介している京都市では、1998年度以降、幼稚園教諭希望者は小学校の教諭免許を取得していなければならない

実践事例

京都市教育委員会

幼小教師が相互に異動して
互いの指導法を学び合う

幼↓小、小↓幼と
教師が1年単位で異動

2006年度に京都市が始めた幼小教員の連携事業が注目を集めている(図1)。これは、幼稚園教員と小学校教員のそれぞれが、定期的な「研究協力校・園連絡協議会」を通して、新しい幼小教育の在り方を探る試みである。実施初年度は、小学校教員2名、幼稚園教員1名がそれぞれ異動した。

事業の背景にはいわゆる「小1プロブレム」(P.22注1)がある。京都市教育委員会(以下、市教委)の松尾真由美首席指導主事(幼稚園教育担当)は教育現場の現状に懸念を示す。

「全国的な傾向ですが、京都市の小学校でも、低学年を中心に、じつくりと話を聞けない、授業中に走り回るといった子どもがいて、授業が成立しない状況が目立つようになりました。こうした現状に対応するため、幼小連携に着目しました」

幼小連携事業が実現した背景には、京都市の教育施策が幼小連携の実施に合っていたことも大きかった。

「京都市の公立幼稚園の教師は98年度の採用以降、全員、小学校教諭免許を取得しています。また、行政職ではなく、小学校教員と同じく教育職に区分されているため、制度面で障害がありませんでした」(松尾首席指導主事)

国の教育施策の動向も視野に入れている。05年に中央教育審議会が今後の幼児教育の方向性を示した答申

「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」では、幼児教育の方向性の柱の一つに「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」を掲げている。具体的な取り組みとしては幼小教員の「人事交流の推進、奨励」が打ち出され、文科科学省は06年に「幼児教育振興アクションプログラム」を策定した。この中で「各都道府県において、少なくとも1例以上、幼稚園と小学校間の長期にわたる派遣研修、もしくは人事交流を実施する」という目標

幼小の人事交流の概要

06年度

- ・小学校教員2名(当時ともに3年目)が幼稚園に異動(ともに3年保育年中児担当)
- ・幼稚園教員1名(当時4年目)が小学校に異動(1年生担任)

07年度

- ・教育センター1名(元小学校教員・当時25年目)が幼稚園に異動(3年保育年中児担当)
- ・幼稚園教員1名(当時8年目)が小学校に異動(2年生担任)

京都市

人口約147万人。1994年には「古都京都の文化財」が世界遺産に登録。05年の京都議定書の発効を機に「環境共生型都市・京都」を目指す。学校、家庭、地域、企業、大学、NPOが連携しての教育改革を推進。市立小学校179校、市立幼稚園16園。5歳児の通園児のうち、国公私立幼稚園へは53.3%、同じく保育園へは46.7%。

【京都市教育委員会】

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る本能寺前町488

TEL 075-222-3807 URL <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/>



京都市教育委員会
指導部 学校指導課
首席指導主事

松尾真由美
Matsuo Mayumi



京都市教育委員会
指導部 学校指導課
首席指導主事

多田彦士
Tada Hikoshi

が示された。

教員の戸惑いを受けて 事業の方向性を見直す

幼小連携事業は07年度には新たな展開を見せた。06年度は幼児教育の改善を重点的に研究することを主目的としていたが、1年間の取り組みの結果、07年度からは幼稚園から小学校への「接続」の在り方に研究の重点を置くことにした。07年度から事業に参画した多田彦士^{ひこし}首席指導主事（小学校教育担当）は、背景をこ

う説明する。

「幼稚園に異動した小学校教師は、『教科書がない』『時間の区切りが不明確』など、小学校とは大きく異なる現場に予想以上に戸惑っていました。もちろん、幼稚園教師も同じです。そこで、まずは幼稚園と小学校が協同で研究し、幼小の違いや子どもが発達の過程を共有することによって幼小の『段差』を小さくすべきだと考えました」

07年度は、小学校と幼稚園に各1名の教員が異動し、研究の推進を図つ

京都市の「幼小間の人事交流事業」

背景

- ・ 幼児の育ちや発達の姿が以前とは異なる
- ・ 「小1プロブレム」が問題化

2005年 中教審答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」

- ① 家庭・地域社会との連携による総合的な幼児教育の推進
- ② 幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実

2006年 文部科学省「幼児教育振興アクションプログラム」

- ・ 目標の1つに、「各都道府県において、少なくとも1例以上、幼小間の長期にわたる派遣研修もしくは人事交流を実施する」が掲げられる

2006年4月～ 幼小間の人事交流をスタート

2名の小学校教員、1名の幼稚園教員が立場を入れ替えて勤務。主に「幼児教育を改善する」という視点で研究をスタート

課題

- ・ 異動した教員の戸惑いが大きく、幼小接続に研究の重点を移す必要性を実感

2007年4月～ 研究主題を見直して人事交流を再スタート

新たに各1名の小学校教員及び幼稚園教員が異動。小学校担当の首席指導主事も参画して研究の推進を図る

課題の把握から実行までの大まかな流れ。研究の進展で明らかになった新たな課題を踏まえ、2007年度には研究の方向性を修正した

た。実際に異動した教師は、どのよ

うな戸惑いや疑問、手応えを感じたのだろうか。教師の声を内容別に紹介する（P.26図2）。

〈空間・時間の使い方〉

小学校…空間・時間の区切りが明確
幼稚園…空間・時間の制約が少ない

幼稚園に異動した小学校教員が異口同音に語っていたのは、空間の使い方の違いだ。廣内厚士先生はこう話す。

「小学生は基本的にクラスごとに同じ空間で過ごすのに対し、幼稚園児はそれぞれ興味・関心によって、教室や廊下、園庭など別々の場所で遊びます。そのため、クラス全員に目を行き届かせるのが難しく、『あの日は今日、何をして遊んでいたのか』と、不安になることがありました」

時間の使い方の違いも大きい。

「小学校では、時間の区切りが明確でチャイムが鳴るといふ当たり前のことに、なかなか慣れませんでした。私を感じたのですから、子どもも小学校に入ったら戸惑いを感じるでしょう」と、幼稚園から小学校に異動した濱田理恵先生は言う。

〈指導法〉

小学校…単元指導計画を基に指導
幼稚園…日々子どもを見ながら指導

空間や時間の使い方の違いは、指導法の違いとも深く関係する。小学校では、年間指導計画を基に単元計画と授業計画がつくられる。指導は、一つずつ階段を上り、最終的なゴールを目指すというイメージだ。

一方、幼稚園には長期的なめあてはあるものの、前日の子どもの様子を見ながら活動内容を調整しており、到達点は全員が必ずしも同じではない。小野順子先生は、そうした幼稚園の指導に難しさを感じたという。

「幼稚園では、決まった教材や指導書はありません。子どもそれぞれの遊びの中の豊かな学びを見取っていくこと、そして、それを次につなげて生かせるようにしていくことの難しさ、大切さを強く感じました」

同様に指導法の違いについて、芝井豊明先生は運動会の種目に関するエピソードを挙げる。

「小学校では、教師が学年に応じた種目を準備します。ところが、私の異動した幼稚園では、ある女の子が

2 幼稚園と小学校の主な違い

	幼稚園	小学校
空間の使い方	・それぞれの子どもが興味・関心に応じて好きな場所で遊ぶ	・クラス単位で教室など同じ場所を過ごすことが多い
時間の使い方	・1日を単位とし、子どもの興味・関心に応じた活動が展開	・1時間を単位とし、時間の区切りが明確
指導方法	・長期、短期のめあてはあるが、前日の子どもの姿や活動を基にねらいや経験させたい内容、具体的活動を調整・予想し、それに応じた環境構成と援助を行う	・年間指導計画、単元計画に沿って授業が進められる ・子どもの学習を深めるための指導を重視 ・毎時間のめあてがあり、指導内容がはっきりしている
評価	・個々の子どもによって目標が異なる。共通の尺度では評価しない(個人内評価)	・毎回の授業に明確な評価基準があり、ノート、作品、テストなどで評価する
環境	・比較的小規模な空間。明るく優しい雰囲気のある環境 ・床に座るなど、自由な姿勢で活動することが多い	・幼稚園に比べると、大きな校舎と広い運動場がある ・主にいすや机で勉強する
保護者との関係	・送迎時に顔を合わせることで、日常的に気づいたことを連絡し合える	・連絡帳や電話による連絡が中心。家庭訪問週間以外にも、必要に応じ、訪問して話し合う
教員から見た子ども	・5歳児後期は、園の最年長として年少児をリードし、主体的に生活を進めるなど、自立した姿がみられるようになる	・1年生は幼く、一からの指導が必要というイメージがある

* 取材内容を総合して編集部で作成

考え出した段ボールを用いる乗り物ごっこが園内に広まり、それが運動会の種目になりました。幼稚園では、子どもの興味・関心に沿った活動を計画し、その中で教師の願いやねらいが達成できるように工夫します」

廣内先生が幼稚園で体験した出来事も幼小の指導法の差を象徴してい

あるとき、子どもたちがリレーをするために石灰で園庭にトラックを描いた。しかし、その円は小さく曲がっていたため、廣内先生は描き直した。子どもたちはリレーを楽しんだが、幼稚園教師には「もったいないことをした」と言われたという。

「幼稚園の先生は、まず子どもが描

いたトラックを認め、そこで十分満足するまで走ることを楽しませたいと言いました。子どもたちにとってリレーをするために円の大小、形の良し悪しは関係なく、実際に遊んで自ら必要性を感じたら、より走りやすい大きさや形を意識したトラックを描き始めるし、発達や経験に応じたねらいから、子ども自身が気づくように、教師が遊びの様子を見ながら働きかけたりすることもあるといいます。まずは、子ども自身が主体的に環境に働きかけ、自分たちでつくった遊びの場で、遊んだり試したりする経験を大切にすることが幼稚園の教育なのだ気づきました」

一方、小学校に異動した幼稚園教師は、どのように感じたのだろうか。那須宏子先生は次のように話す。

「幼稚園では『きれいだね』『見つけたよ』と子どもとの共感を大事にしますが、小学校では、いろいろな考えを導くための言葉かけも多かったです」

那須先生は、幼稚園教師の頃、小

学生になると「〜です。理由は〜だからです」といった話し方に変わることを不思議に思っていたという。ところが、小学校を体験し、少しずつその思いが変わっていったと話す。「子どもが話型を使って話すとわかりやすいことに気づき、いったん自分のものにしてしまえば、より豊かに自分の思いを表現できるのではないかと考えるようになりました。幼児期に『話したい』という思いを十分培っておくことが重要だと思います」

＜評価方法＞

小学校…客観的な評価指標

幼稚園…独創性や心情面を重視

評価法も幼小では当然大きく異なる。那須先生が担任したクラスに昆虫が大好きな小学生がいた。ミニトマトの苗を観察させたときに、その子は「葉っぱがいっぱいあってトンネルみたい」と書いたという。

「その子は昆虫の気持ちになって表現していたのです。『面白い発想だね』

と認めましたが、『このよさが各教科では評価されにくいのでは』と思ひ、難しいと悩みました」

濱田先生も評価について考えさせられる点があった。

「小学校には通知表があり、子どもを評価するというところに戸惑いました。評価は教師自身に返ってくるものであり、子どもが興味を持ってなかったのであれば、教師が自分の指導の在り方などを見直していかなくてはならないものだと考えるからです」



写真上：幼稚園の教室は、窓や壁に飾り付けがされ、明るくかわいらしい雰囲気だ
写真右：幼稚園では、毎日の送り迎えの際に保護者と教員が顔を合わせる。その日の子どもの様子を伝えることも容易だ



その他の違い

校舎・教室環境のギャップ 保護者との関係など

幼稚園は小学校に比べて園舎の規模が小さく、明るくかわいらしい雰囲気だ。一方、小学校は校舎が大きく、やや殺風景な印象がある。廣内先生は、こうした環境の違いが子どもに及ぼす影響について指摘する。

「普段は元気な園児が、高齢者施設の訪問時に急に緊張してしまったのです。『こんなにも環境の変化に戸惑うのか』と驚きました。小学生になると、見慣れない校舎に通い、体の大きな上級生たちに囲まれ、いすに座って勉強し、時間を区切って行動します。これだけ環境が変われば、子どもが戸惑うのは当然でしょう」

保護者との関係にも、幼小には大きな違いがある。幼稚園では毎日の送迎で顔を合わせるため、報告や相談がしやすく、信頼関係を築くのが比較的容易だ。一方、小学校では連絡帳によるやりとりがメインで、顔を合わせる機会が少ない。「保護者の気持ちを汲み取るのが大変だった」と、那須先生は話す。

低学年では 心に寄り添った指導を

京都市の実践は小学校低学年での指導に生かされようとしている。小野先生は「小学校での指導は一から始めると考えられがちですが、そうではないと実感できました」と話す。

「保育を通して就学前の子どもたちの姿や発達段階を知り、子どもの力や成長がつかえていることを強く実感できたのです。幼小双方が違いや共通点を知りながら、接続期の子どもが一人の人として成長する上で大切な支援とは何かを、共に探っていくことが大事だと思います」

那須先生は、小学校に入学しても教師や友だちと直接触れ合う機会を大事にしたいと思った。そこで、教室には自由に使える空間や温かみのある環境にすることに取り組んだ。一年を通して、教室の後ろの空間に子どもたちを集め、触れ合える距離で本の読み聞かせを続けると共に、本を通して子どもが共感し合える場をつくる取り組みを続けた。

「次第にその時間が好きになり、本に興味を持つ子どもが増えました。低学年にはもつといろいろな感情を

交流させる場が必要だと思います」

また、那須先生は、低学年の教室には植物や飾りを置くなど、温かみのある環境にすることを提唱する。

幼稚園から子どもの様子を小学校に伝える書類に指導要録がある。ところが、小学校には、幼稚園、保育園や国・公・私立など、さまざまな幼児教育施設から入園してくるので、『偏見を持ちたくない』と読まない小学校教師が多い。

「本人のことを知らずに読むと内容がわかりづらいと思います。それでも、幼稚園の教師は心を込めて書いています。また、わからないことは、幼稚園や保育園に聞ける関係を築くことも大切でしょう」（濱田先生）

多田首席指導主事は、更なる取り組みの広がりを期待している。

「異動していた教師が元の学校に戻って実践することで、より大きな成果が表れるでしょう。同時に報告会などで積極的に発信し、市内の学校に広めていきたいと考えています」

子どもの成長は連続している。これまでの幼稚園と小学校がお互いをあまり意識してこなかったその事実を軸として、京都市の教育は新たな段階に入ろうとしている。

小学校英語

新連載

実践事例

さいたま市教育委員会

コミュニケーションの 楽しさや面白さを 英語の世界で体験させる

さいたま市の公立小学校では、5・6年生を対象として「英会話」の授業を週1時間行っている。さいたま市独自のカリキュラムを作成し、授業の流れを示すと共に、子どもたちが毎時間必ず英語を使ってコミュニケーションを図る場を設けているのが特徴だ。

評価規準を明確にして
小中の英語教育を
スムーズに

さいたま市の公立小学校における英語教育は、2005年3月に内閣府から「小・中一貫『潤いの時間』

会話」だ。

「総合的な学習の時間」等を使った英語活動も1年生から行われているが、特区として実施する「英会話」は小学5年生～中学3年生が対象。

06年度に研究指定校7校が先行して始め、07年12月からは市内の全公立小・中学校で実施された。小学校5、6年生の授業は、週1回の年間35時間で、さいたま市教育委員会と学校が協力して開発した英会話カリキュラムに沿って進められる。

「英会話」のねらいは、英語によるコミュニケーション能力の育成だ。具体的には、次の3要素を設定している。

- ① 資質―積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲・態度
- ② 能力―相手の情報やメッセージを正しく理解し、自分の気持ちや考え等をわかりやすい方法で相手に伝える
- ③ ソーシャルスキル―話し方のルールやマナー

特筆すべきは、明確な評価規準が設定されていることだ(図1)。カリキュラム各段階の目標が3要素の何に当たり、どのような評価規準となるかが明確に記されている。統一規



さいたま市教育委員会
学校教育指導1課
副参事
利根川恵子
Torigawa Keiko

準をつくることで各校の裁量で進められていた英語活動のバラツキが是正され、中学校とのスムーズな連携が可能となった。

評価の対象は、発音や文法の正確さではなく、コミュニケーションへの積極性と意欲だ。さいたま市教育委員会学校教育部の利根川恵子副参事は、「教師は完璧な英語を使う必要はありません。間違ってもいいから一生懸命に英語を使おうとする姿勢を示すことが重視されています」と説明する。小学校で養うべきは、子どものコミュニケーションへの意欲と積極性と位置づけているのだ。

コミュニケーションの
楽しさを実感できる
活動を組み込む

「英会話」では1コマの授業の流れが示されている(図2)。まず声を出

図1 英会話の評価規準（小学校5、6年のみ抜粋）

英語によるコミュニケーション力（資質・能力）	A 国際社会における人間関係構築力 <small>（積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲・態度）</small>	<ol style="list-style-type: none"> 1 誰とでも進んでコミュニケーションを図ろうとしている 2 相づちをうったり、メモをとったり、感想を伝えるなどして、相手の話に反応しようとしている 3 相手に体を向け、目を見て聞いたり、話したりしようとしている 4 相手に伝わる音量で受け答えしようとしている 5 誰とでも協力して活動しようとしている 6 出会い、別れ、感謝などにおけるマナーを身に付けようとしている 7 間違ふことを恐れず行動しようとしている 8 外国や日本の家庭や学校における日常生活や風俗習慣などを比べ、異文化や自国文化に興味を示している
	B 推測し、理解する力 <small>（聞く力）</small>	聞き取った言葉、身振り、手振り、表情などを手がかりに、話の内容を大まかに推測し、反応している
	C 自己表現する力 <small>（伝える力）</small>	<ol style="list-style-type: none"> 1 自分や友だちのことについて、言語・非言語スキルを使って伝えている 2 慣れ親しんだ言語や非言語スキルを使って、理由を付けながら伝えている
	スキル <small>（国際社会に必要な行動様式・英語によるコミュニケーション活動）</small>	あいさつなどの初歩的なマナー 初歩的なコミュニケーションの回り方

出典／さいたま市小・中一貫『潤いの時間』教育特区「英会話」カリキュラム（さいたま市教育委員会）

図2 1単位時間の活動の過程

Procedure(授業手順)	
1. Greetings(あいさつ) Weather & Day <small>(天気・曜日)</small>	ここでは、元気に日常のあいさつをしたり、曜日、天候等を尋ねたりし、明るい雰囲気の中で英語の活動が行えるようになります。
2. Warm up(ウォームアップ) Song(歌)等	ここでは、身体を動かしたり、声を出したりし、心と身体がリラックスするよう心掛けます。また、前時に実施したことを思い出したり、本時に関係のある表現や語彙に触れたりします。
3. Introduction of Target Expression <small>(目標表現の導入)</small>	ここでは、場面を設定し担任やALTなどが新しい表現を用いてコミュニケーションを楽しく図るモデルを示します。これにより、児童はどのような場面で英語が使われるのか推測します。また、指導者同士のやりとりや、児童を巻き込んだやりとりの中で、繰り返し英語を耳にすることで、自分も話してみたいという意欲を喚起します。
4. Activities <small>(目標表現に慣れ親しむ活動)</small>	ここでは、5のコミュニケーション活動につなげるために、新しい表現をまねたり、場面に応じて表現の一部を変えたりしながら、その表現に慣れ親しみます。指導者は児童が発話することに自信が持てるよう、励ましたり支援したりします。
5. Communication Activity <small>(コミュニケーション活動)</small>	ここでは、必ず人のかかわりを大切にコミュニケーション活動や、発表などが行われます。児童には、今まで慣れ親しんできたあいさつやお礼の表現を組み合わせながら、友達や先生と楽しくコミュニケーションを図れるような活動が用意されています。また、コミュニケーションを図る上で重要となるマナー等のスキルをしっかりと意識させます。
6. Greetings <small>(終わりのあいさつ)</small>	本時の活動で自分が頑張ったところや、友達のよかったところを認め合い、次の活動への意欲付けとします。

出典／同上

す、体を動かすといったウォームアップによって英語を使う雰囲気をつくる。次に、ゲームなどをしながら新しい表現を学び、今まで習った表現を組み合わせながら友だちや先生とのコミュニケーションやプレゼンテーションができる段階への到達を目指す。

ポイントは図2の4と5の結び付きだ。4「目標表現に慣れ親しむ活動」で恥ずかしがっている子どもがいれば、教師はその子を励まし、

抵抗感を取り除くようにする。これがうまくいけば、5で「人とかわかることは楽しい」と実感でき、コミュニケーション能力が育まれる。このように授業の目標を明確に設定すれば、このパターンに沿って授業を進められる。汎用性の高い授業モデルといえるだろう。

「英会話」の導入をきっかけに、子どもはよい方向に変わりつつある、と利根川副参事は話す。例えば、寡黙だった子どもが、1年後には英会

話の時間には自分から話すようになった。

「子どもにとって、英語を使うと日本語とは別の感覚に入っているようです。日本語の世界では実現できない自分が、英語の世界では実現できるという子どもがいて、その子にとっては自己を表現できる場になっていくのでしよう」（利根川副参事）

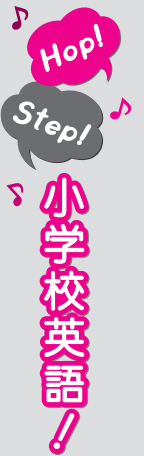
国語で話し合い活動に力を入れていた教師からは、英会話導入以降、子どもたちの討論・意見をまとめる

といった力が目に見えて向上したとの報告があった。

このように、さいたま市が開発した英会話のプログラムは、大きな成果を上げつつある。コンセプトである「英語を通じたコミュニケーション力の育成」は、文部科学省が提唱する「外国語活動」の目的と非常に近く（P. 32～33参照）、11年度からの高学年への外国語活動導入を控える小学校にとってよいモデルケースの一つといえるだろう。

さいたま市が行う「英会話」の指導案

(1コマの授業の流れ)



Elementary School (小学校第5学年)

1. Date(日付)/Class(クラス) 1時間目/2時間扱い(1時間目/全35時間)
2. Unit Title(ユニットタイトル) 「はじめまして」
3. General aims of this lesson(レッスンの目標) 友だちに英語であいさつをする
4. Assessment Criteria(評価規準) 友だちとのあいさつで、相手の目を見て話そうとしている
5. Words & Expressions(語彙&表現) Hello. My name is ____ . Nice to meet you.
6. Teaching Procedure(授業手順) 下記のIntroduction (0) ~Greetings (5)

2 Warm up (ウォームアップ) Song (歌) 等

10分

活動例 Warm up

♪ Hello Song を歌いながら握手!

- 1 1回目は歌のみ。2回目は歌と握手、アイコンタクト、スマイルを組み合わせて実施。
- 2 終了後、指導者は、児童が何人の友だちと目を見ながらスマイルで握手ができたかを確認。多くの友だちとあいさつができた児童を、クラス全員が拍手で賞賛する。

point 2 握手の大切さを伝えましょう

国際社会では、握手は「私はあなたと仲良くなりたい」「あなたを信頼しています」という意思表示でもある。握手の力の加減やアイコンタクトの仕方なども大事。初対面の相手により印象を与え、よりよい人間関係を築く上で握手は大切であることを児童に伝えよう。

※NGの握手

会釈をしながらの握手はダメ!

- 1 腰が引けて相手の目が見られない
- 2 首をかき上げながら相手を見ようとすると、上目づかいになる

1 Greetings (あいさつ) & Self-Introduction (自己紹介)

10分 (Introduction [0] を含む)

- ・ALT (外国語指導助手) または JAT (日本人英会話講師) による自己紹介
- ・担任による自己紹介
- ・やってみみたい児童はALTまたはJATとあいさつをする

A: Hello. My name is ____ .
Nice to meet you.
B: Nice to meet you too.
(握手)

point 1 1時間目の授業では、担任の笑顔やジェスチャーたっぷりのアクション等によってルールを説明。児童の不安を解消し、「自分もやってみたい」という意欲を喚起させる。目的はあくまでも英語スキルではなく、コミュニケーション能力の向上。身振り、手振り、表情など非言語スキルを使っても、言いたいことは伝わることを経験させる。

0 Introduction

活動例 英会話ルール説明

※「英会話」での約束(ルール)確認

ア.英会話の時間は、「英語で人と触れ合う時間」「外国のマナーを身につける時間」

この時間は英語だけの世界と考え、英語をたくさん使おう。また、将来外国人の友だちをたくさんつくるために、外国のマナーを身につけよう。

イ.英会話の時間は「推理ゲームの時間」

英語が一語一句わからなくても大丈夫。頭の中で日本語に直さないことがポイント。わからないときは、友だちや先生の真似をしよう。

ウ.英会話の時間は「仲間づくりの時間」

男女問わず、日頃あまり話さない人にも積極的にかわり、たくさんの人とコミュニケーションを図ることを大切にすると、世界中に友だちができる。

★指導者のスタンス

→「間違い大歓迎」
「わからなくて当たり前」

That's all for today.
Good-bye, everyone.
See you next week.

point 4 コミュニケーションの基礎となる要素を、右の絵カードを必要に応じて提示しながら児童にしっかり伝える。



5 Greetings

(終わりのあいさつ)

5分

活動例

活動後、または単元終了後に自己評価や児童同士の相互評価を行う。

自己評価の場合はカードに記入させ、相互評価の場合は好ましい活動のできた友だちについて発表させる。

振り返りカード(抜粋)

英語のあいさつを、笑顔やアイコンタクトを意識して行いましたか？

友だちや先生の話を中心して聞きましたか？

友だちや先生に進んで話かけようと思いましたか？

友だちや先生に自分の持っているものについて、はっきりした声で伝えましたか？

クラスやグループの友だちと協力して活動しましたか？

ゲームの時、できるだけ英語を使おうと思いましたか？

今回の活動で楽しかったものは？
(選択肢から選び、1～4の順位をつけさせる)

4 Communication Activity

(コミュニケーション活動)

10分

活動例 忍者アタック

1 児童に目をつぶらせ、担任らが何人かの児童の肩に触れ、忍者を決めておきます。

2 以下の忍者の掟にのっとり、ゲームを進める。

●忍者は他の児童に知られてはいけぬ。

●忍者はあいさつまたは自己紹介の途中でウインクをする。ウインクされた相手はその時点で負け(ただし活動は続ける)。

●忍者同士があいさつを交わした場合、先にウインクをしたほうが勝ち。

3 ゲーム開始

4 ゲーム終了後、担任らのOne、Two、Threeの合図で忍者にアタックされた人(負けた人)は座る。

5 勝ち残った忍者が「スーパー忍者」の認定を受ける。

point 5 自己評価・相互評価の役割

- 自分の頑張った点を認識させ、次の活動への意欲を高める。
- 担任たちが評価の参考にする。
- 指導方法の工夫・改善に役立てる。
- 自己評価カードを保存しておくことで、自分の活動を振り返ることができる。

3 Activities

(目標表現に慣れ親しむ活動)

10分

活動例 グループ作りゲーム

言われた人数のグループを作り、座る。

例:

Please make groups of (5)

※ペア→4人→6人と増やしていくとよい。

動物等の足の数でも可。

a bird → 2
an ant → 6
two lions → 8

point 3 ここでは「友だちとのあいさつで、目を見て話そうとしている」かどうかの評価の対象(P.29図1)。つまり英会話でなくコミュニケーションが主体の活動であることを児童に意識させる。

- 児童同士が互いの良い点を見つけて励まし、高め合う。自己・相互評価を通し、児童は活動の目標を明確に意識できる。目標を理解していることで、得られる成果は大きくなる。

文部科学省 Q & A

「コミュニケーションの 楽しさ」と、英語への興味を 引き出す場へ

2011年度から5・6年生で週1回の外国語活動が必修化されることに対して、学校現場からは、英語を教えることへの戸惑いや不安が多く聞かれる。英語活動はどのように進められ、支援体制はどのようになるのだろうか。文部科学省初等中等教育局教育課程課の菅正隆教科調査官に聞いた。

文部科学省初等中等教育局教科調査官

菅正隆

**小学校における
外国語活動必修化の理由は
何でしょうか。**

A 主に三つ挙げられます。一つめは、

現在、各校独自に行われている小学校での外国語活動のバラツキを是正するためです。全国の小学校の9割以上が主に「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を使って外国

語活動を行っています。一方、内容や頻度にバラツキが生じていたことは否めません。今回の必修化には、最低基準を設けるといふ意味があります。

二つめは、子どもの興味・関心や適応力が高い段階から外国語活動を導入し、より高い効果を上げたいという考えです。

三つめは、グローバル化への対応

です。諸外国では、初等教育から英語教育が行われています。中国では2005年から小学3年生以上で、韓国では97年から小学3年生以上で英語教育が始まっています。母国語にこだわるフランスでさえ、07年より外国語1か国語が必修化され、うち9割が英語を選択しています。日本だけがこの流れから外れるわけにはいきません。

**小学校での英語活動に
期待することは何でしょうか。**

A 英語の運用能力を伸ばすのは、中学校でよいと考えています。小学校では、その下地となる興味・関心を伸ばしてほしいと思います。

今の子どもは、お金を入れてボタンを押すだけで物が買えるような、言葉をあまり使わずに済む社会に生きています。言葉が出てこないために手が先に出てしまう、言葉の力を知らずに人を傷つけてしまうといったことが社会問題化している今だからこそ、コミュニケーションの楽しさを子どもに体験させてほしいのです。人とのコミュニケーションを通

して自分の気持ちを伝えられる子どもを育てていただければ、外国語活動は成功と言ってよいでしょう。先生方には自信を持って取り組んでいただきたいと思います。

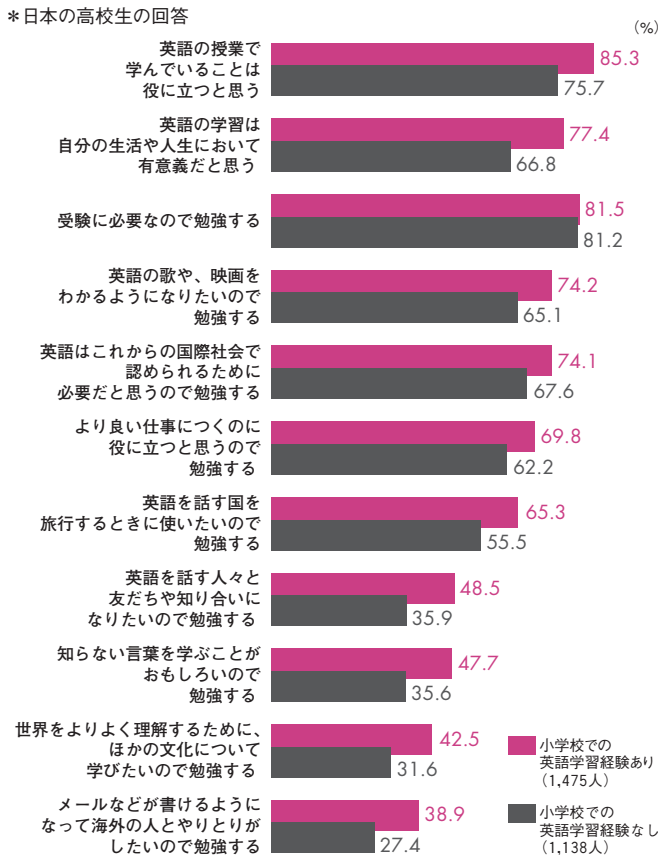
**外国語活動の導入までの
スケジュールは
どうなっていますか。**

A 10年度までは移行期間と捉え、まず各校で英語活動を始めてもらうことを目的としています。英語教育の専門家でなくても無理なく指導できるよう、08年3月末までに、児童向け教材「英語ノート（仮称）」（注1）とそれに付随するCD、電子黒板、教員向けマニュアル、教員研修のガイドブックや教員向けクラスルームイングリッシュ（教師が教室で日常的に使う英語表現）のCDなどを完成させました。

08年度には、これらの「英語ノート」などの教材、教員向けガイドブックなどを発行します。これらは、まず拠点校550校に配付し、活用した意見を集めて改訂し、同年度中には全小学校に配付しますので、大いに活用してほしいと思います。

注1 文部科学省による開発。5年生・6年生それぞれ9レッスン。1レッスン＝4時間構成で、いずれかのレッスンを1時間減らせば35時間となるカリキュラムが土台となっている

図1 小学校での英語学習経験と現在の英語学習に対する意識



*「とても当てはまる」「まあ当てはまる」の合計

*「小学校での英語学習経験あり」は小学生以前に英語を「学校でのみ」「学校と学校外の場所両方で」学習した生徒。「小学校での英語学習経験なし」は、小学生以前に「英語は勉強していない」生徒

出典/Benesse教育研究開発センター「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」

小学校で英語学習を経験した生徒の方が、経験のない生徒に比べて、現在の「英語の授業」が役に立ち、「英語の学習」は有意義であると感じている割合が高い。しかし、「受験に必要なので勉強する」という学習動機では、小学校での英語学習経験による差はほとんど見られない。一方、「英語を話す人々と友だちや知り合いになりたいので勉強する」などのコミュニケーションについての動機や、「知らない言葉を学ぶことがおもしろいので勉強する」などの言葉や文化への興味についての動機では、小学校での英語学習経験がある生徒の方が10ポイント以上高い

指導者育成、研修などの計画を教えてください。

A 07年度に全国の5ブロックで、都道府県・政令指定都市の指導主事を対象に1週間で計25時間の研修を行いました。08年度は、都道府県・自治体が主体となって中核教員研修を実施します。これは、各校から1名参加する代表者を対象とした研修です。代表者は自校に戻ったら、

2年間で30時間の校内研修をするこ
とになっています。

英語を教えることに
多くの教師が
不安を感じています。
教師はどのような視点で
指導すればよいのでしょうか。

A 必修化の目的は、英語のスキル
ではなく、積極的にコミュニケーション
を図ろうとする態度の育成で
す。指導の中心は、子どもをよく知

る担任の先生が適任と考えます。完璧な英語を使う必要はなく、子どもには人と交わることの楽しさ、言葉の大切さを伝えてほしいと思います。

中学1年生の授業との接続は
考慮されているのでしょうか。

A 新しい学習指導要領では、小学
校英語と中学校英語は連携した
内容になっています。これまで中学

校では、例えばアルファベットの書き方に何時間もかけていましたが、小学校で英語活動を経験してきた生徒への指導は短時間で済むでしょう。小学校によっては更に進んだ英語活動を行っているかもしれませんが、それは中学校の先生が校区の小学校と連携して把握すべきだと思います。英語必修化によって小学校の先生が変わる以上、中学校の先生も変わらなければならないと思います。

高学年で既に週1回以上、
あるいは低学年、中学年でも
英語活動を行っている学校も
ありますが、そのような学校は
どう捉えたらよいのでしょうか。

A 今回の必修化はあくまで「最低
ラインの設定」であり、各校の
発展的な取り組みを妨げるものでは
ありません。例えば、週1回の外国
語活動を更に探究につなげた場合、
総合学習を活用しても、もちろんよ
いのです。各校の目標に合わせて工
夫していただきたいと思っています。



文部科学省
初等中等教育局教科調査官
菅正隆
Kan Masataka

地方分権時代の 教育行政

地方自治体の学校教育への
新たな取り組み

岡山県 総社市

学級担任向けに日英併記で 小学校英語の指導案を作成

総社市教育委員会が小学校英語の本格的な導入を決めた2005年度当時、不安を抱く教師は少なくなかった。「まずは学級担任が英語を楽しまなければ、子どもが英語を楽しめるはずはない」——そう考えた教育委員会が中学校と連携して作成したのが、日英併記の年間指導案だ。

学級担任中心の指導を 実現する仕組みづくり

吉備王国の中心として栄えた総社市は、古代の城跡や古墳が点在する遺跡の宝庫である。その恵まれた環境を教材として故郷への理解や愛情を育む「ふるさと教育」は、総社市の教育の大きな特色となっている。その教育と並行して力を入れているのが、国際理解教育だ。総社市教育委員会（以下、市教委）学校教育課の

上岡仁課長は、次のように説明する。

「まずは自分の故郷を愛することが、世界中の人々がそれぞれ故郷を持つていて、世界の中の人々がそれぞれ故郷をつながるのではないだろうか。そうした考えから、ふるさと教育の一環として国際理解教育を推進してきました」

その取り組みは、1960年代に市内の中学校に岡山大の留学生を招いて交流を始めたことに遡る。「ALT（外国語指導助手）」という言葉すらまだなかった87年には、市独

自に外国人助手として数名を採用。

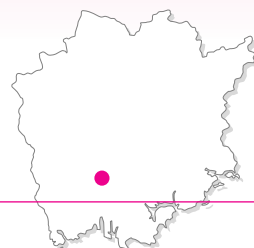
01年度には、ベルリッツ岡山の協力を得てベネッセコーポレーションが組織した3名のALTが英語の授業に入るようになり、小学校（年間3～5日間）と幼稚園（同1～3日間）でもALTによる国際交流が始められた。

「大切にしているのは、『人』の魅力によって英語に興味を持たせることです。指導の技術よりも、楽しく歌ったり踊ったり、休み時間に一緒に遊んだりできるコミュニケーション

ン能力を重視してALTを採用しています」

幼稚園にALTを導入するのは、小学校、中学校の英語教育にスムーズにつながることに、早い時期から外国人に親しみ、異文化を受け入れる人間性を育む狙いもある。

05年度には、各小・中学校から1名、計19名の教師を集めて、市の教育研修所に「小学校英語研究委員会」を設置。低学年では10時間、中・高学年では20時間を英語活動に充てることを決め、同委員会によって年間



概略

■岡山県総社市

人口約6万8000人。古代吉備王国の中心として栄え、市内には古墳や古代山城をはじめ歴史的遺産が点在する。瀬戸内地域特有の温暖な気候に恵まれ、果物などの生産も盛ん。郷土文化への理解を通じた人権教育や環境教育にも力を注ぐ。市立小学校15校、市立中学校4校。

【総社市教育委員会】

〒719-1192 岡山県総社市中央1-1-1 TEL 0866-92-8358

URL http://www.city.soja.okayama.jp/kyoiku_bunka/kyoiku/kyoiku_iinkai/kyoiku_iinkai.jsp

図 1年生の1回目の指導案

「ねらい」「教材・教具」「授業計画」の項目に分け、それぞれ英文と日本語で書かれている。6年生までの毎時の指導計画が作られている。

Lesson Plan 1 (レッスン案・1)

Year1 (1年生)

Objectives:

- learn and be able to use some basic greeting expressions
- learn and be able to introduce themselves
- learn some action English and be able to do what the ALT says

Materials:

HRT prepares: blank name cards

ALT prepares: photos and objects from his/her country

Plan:

1. Greetings

"Good morning/ afternoon, Hello"

ALT greets the students and briefly introduces where s/he comes from showing pictures and objects from native country.

2. Self-introduction

ALT teaches a basic version of greeting and self-introduction dialog, demonstrating with the HRT first.

"Hello. Good morning. My name isNice to meet you."

3. Game: Name card Exchange

ALT distributes blank name cards to students (3 per student), and have them write their names and practice the dialog exchanging cards.

4. Game: Action English

Gesturing, ALT teaches some action verbs; jump, stop, touch, turn around, stand up, sit down.

Students do what s/he says.

5. Greetings

ねらい:

- 元気にあいさつができる。
- 自己紹介の仕方がわかる。
- 動きに関する英語を知り、英語の指示に従って体を動かすことができる。

教材・教具:

担任が準備するもの:(名刺交換用の)白紙の紙・児童数×3枚

ALTが準備するもの:ALTの母国の写真やもの

授業計画:

1. あいさつ

「おはようございます。こんにちは。」

ALTは児童にあいさつをし、母国の写真やものを見せながら、自己紹介をする。

2. 自己紹介

ALTはHRTと一緒に基本的なあいさつと自己紹介についてまず見本を見せる。

「こんにちは。おはよう。私の名前は……。お目にかかれて嬉しいです。」

3. ゲーム:名刺交換

ALTは、児童1人につき白紙の名刺カードを3枚ずつ配る。児童は、名前を書き見本の内容を練習する。

4. ゲーム:動いてみよう

ALTはジェスチャーをしながら、児童に動作を教える。ジャンプ、止まる、触る、まわる、立つ、座る。児童はALTの指示に従って体を動かす。

5. あいさつ(まとめ)

指導計画がつくられた。「教師自身が教えることを楽しいと思わなければ、子どもが英語を楽しめるはずがありません。そうした考えの下、英語が不得意な教師でも無理なく教えられる指導計画を作りました」

指導計画には現場のアイデアが重要と考え、委員とALTが話し合い

を重ね、ベネッセコーポレーションのカリキュラムを現場の教師が使いやすいように改訂した。特徴は、毎回の学習の流れや教師の発言を日本語と英語で併記していることだ。これにより、ALTではなく、担任が中心となって指導できるようになった。

06年度からは市教委主催の夏休み

英語の交流をきっかけに
小中連携を深める

研修会(2~3日間)を行い、指導のレベルアップを図る。主な内容は県内の先進校の教師の講演や具体的な指導例の紹介で、市内公立小学校の教師のほぼ全員が参加している。

05年度からは、英語

活動において小中連携が始まった。初年度は小・中学校の教師が互いの英語の授業を見学し合い、07年度には中学校の英語教師が小学校の授業に入ってチームティーチングを行った。

「中学校の教師には、文法などを教えようとする意識が強くあるようです。しかし小学校英語では、子どもが英語の楽しさを感じることに主眼となります。小学生への指導に触れることで、中学校の生徒に対して英語の楽

しさを伝えられるような指導をしてほしいと思っています」(上岡課長)

この英語活動をきっかけとして、他教科や学校行事などでも小中連携を進めていく考えだ。

今後は、文部科学省が小学校英語の教材として08年度中に配付する予定の「英語ノート」(仮称)の内容などを考慮し、年間指導計画を改訂する予定だ。

「現行の指導計画は授業ごとのつながりが弱いことが課題です。新学習指導要領の実施で5・6年生の英語活動が年間35時間となると、導入・練習・発展というように、単元としてのまとまりを意識して展開する授業にしなければ、子どもを満足させる内容にはならないと考えています」と上岡課長は話す。地域ボランティアを採用して英語教育の充実を図ることも、今後の課題だ。

3年後に始まる小学校での外国語活動の必修化を控え、総社市の取り組みが今後注目される。



総社市教育委員会
学校教育課課長
上岡 仁
Uekawa Hitoshi

2008年 1月号

データで読み解く
新学習指導要領Benesse教育研究開発センター
「第4回学習指導基本調査」より

Benesse教育研究開発センターが実施した「第4回学習指導基本調査」の結果を基に、過去10年間に渡る学校現場の変化を踏まえながら、新しい学習指導の在り方を読み解いています。

2007年 4月号

みんなで取り組む
小学校英語Benesse教育研究開発センター
「第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)」より

ベネッセコーポレーションが実施した調査の結果、まだまだ多くの課題があることが明らかになった小学校英語。調査結果と共に、実りある小学校英語活動を実践するためのヒントを紹介しています。

2007年 9月号

つながる
「保護者」と「学校」

学校にクレームを寄せる保護者が増えているといわれていますが、本来、子どもを育てることは、学校と保護者の共通の使命です。両者が協力して子どもを育てる大切さを改めて考えます。

2007年 1月号

量から質へ—
これからの
学びを考えるBenesse教育研究開発センター
「第4回学習基本調査」より

ベネッセコーポレーションが実施した調査の結果、小学生の学習離れに歯止め傾向が見えてきました。学習量の回復を豊かな学びにつなげるには、どうすればよいかを考えます。

2007年 7月号

教師がつながる
「授業研究」

指導力の向上に欠かせない授業研究。ところが最近では、学校現場の多忙化や世代間ギャップの拡大で、その文化の維持が難しくなっています。学校全体・教師個人が、着実に力を積み上げられる授業研究の方法を探ります。

2006年9月号

コミュニケーションが生まれる授業づくり

コミュニケーション力育成の手法を、識者の対談や学校事例から探る。

2006年特別号

学力調査を指導改善に生かす

「全国学力・学習状況調査」の狙いや結果の生かし方について詳しく解説。

2006年4月号

「学校力」を生み出す学校評価

学校評価をつまみ取り入れながら、学校力を高めていく方法を先進事例から考える。

2006年1月号

つながる幼小の「学び」—幼稚園・保育園から小学校、その接続を考える—

「遊び」を通して学ぶ幼児教育から、教科学習中心の小学校へつなぐ実践のヒント。

2005年9月号

「考える力」を引き出す授業—理数教科からのアプローチ—

子どもの「考える力」を引き出す授業とは? 理数教科を手がかりにヒントを探る。

バックナンバーは、Benesse教育研究開発センター
ウェブサイトでご覧いただけます<http://benesse.jp/berd/>VIEW21 夏号
小学版次号は
2008年6月下旬発行
【VIEW21】小学版は年4回の発行(予定)です

編集後記

新しい学習指導要領が告示されました。今年度は、この新学習指導要領を年間のテーマとして、最新の情報や取り組みのヒントをできるだけ具体的に、わかりやすくお伝えしようと思っています。また、低学年指導と小学校英語のコーナーも新しくスタートします。今、学校教育は大きな変化の中にありますが、その中でも変わらないもの、変えてはいけないものをしっかりと見据えながら、先生方と学校をサポートする情報誌を目指して参ります。今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。(佐伯)

VIEW21小学版 2008 春号

2008年4月7日発行/通巻第16号

発行人	新井健一
編集人	原 茂
発行所	(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター
印刷製本	大日本印刷(株)
編集協力	(有)ペンダコ
執筆協力	柴崎朋美、滝本喬、二宮良太、長谷川敦
撮影協力	川上一生、川本聖哉、道敬一、ヤマシタカコ
イラスト協力	タコトモコ、山本重也、幸剛

お問い合わせ先 VIEW21編集部
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー2階
電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2008